

76

180

登高自卑

日本ゆにたりあん弘道會發行

退步學人 佐治實然君序
旭川 岸本能武太君序
神田 佐一郎編述

76
180

序



凡そ人々の間に最も親しき友誼は、夫婦に於て見るを得へば、心といふものあり、さうありなし、人類兩性の交情は言語に絶へたる美妙を盡せりといふべし。然るに人はたゞ家をつくりて、夫婦同居の樂しみを取りて満足せず、彼等は漸く生活の範圍をおしひろめ、色々のとを營まんを好むもの也。此は今と昔とを問はず、自ら人情の然らしむる所なりとやいはんか。されは誰れ彼れをいはず、己か家を出て、職務を執り、或はある事を成さんとの的を立つるに當りては、一人にても友の多きを願はざるはなし、况や身を異にして心を同くする友のなくては、些少の事にても爲し途けらるべき道のなきをや、實に友は人に取りては無價の寶なり。さて予か宗教の上に心を同しくし、事を共にする人も多かる中に



いと深きゆかりある親しき友なる神田樂天居士は、温雅にして學識ある人なり、居士近頃一書を著はし、自ら題して登高自卑といふ、一日予に其草稿を示して何にても一言を卷首にかきてよといひき、予受て之を見るに、凡そ宗教にわづかる主題五七を擧げ、問答の体裁にて説き明すと、極めて簡易にして克く題の正鵠に當れり、苟も世の宗教を知らんと欲するものは、一たび此書を通讀するの勞を吝まされは、たやすく已か志す所を果すとを得ん、又諸宗派の教義のあちこちをきき、知りて自ら眞偽の別ちさへ爲すに苦しめる人とは、一たび此書の首尾を熟讀すれば、忽ち己心界の迷霧をはらして、信仰の基を固め、進みて宗教の堂奥に入るにかたからず、實に登高自卑の名にそむかずといふべし、予常に吾協會の主義を人に語れり、而して語る毎に、諸人備忘の資に充つべき簡易なる冊子なきに苦しむたりしか、今此書の知きは、予が常に希望し理

想せしものと、全く契合して、毫も餘蘊なし、謂ゆる入我我入とは是等のとをいふにや、さるにても予の理想か親友樂天居士の手に依りて現はされたるとは、不思議の極みにして、盲龜の浮木よりも少れなる例にそある、曾て聞く、友は第二の我なりと、予はいふ、友は我よりうへの我なり、友は善良にして才智ある我なりと、予はかゝる友を得て、己か力にあまれる事をも爲し、遂げ、己か死後にも善友に依りて長へに活き得べき道のあらんとを願ふものなり、夫れ宗教といひ、道徳といふ、理論より考ふるときは、深遠幽微にして、僅に其一端をも知るに由なきか如しと、雖も詮する所人とをして、四海兄弟の友誼を履み行はしめんとするに外ならず、而して今予は幸に居士によりて、かゝる天地の大道を履むべき好機を得たり、何の喜ひか之に如かん乎、何の樂しみか之に勝るものあらむ、依て予と居士の平素の友誼をゆへ、居士の高擧に應じて、序言とす

日本ゆにてりあん協會にて

明治三十年十一月

退歩學人 佐 治 實 然

登高自卑に序す

學友樂天堂主人神田佐一郎君近頃一書を著し名けて「登高自卑」と云ふ此書章を重ぬること六次曰く神曰く人曰く宗教曰く道德曰く聖人曰く唯一教而して每章は若干の問答より成り且つ其字句平易なるが故に論旨極めて明白にして何人も容易に宗教上の高尚幽玄なる真理を了解し得べく又大に己れの精神的教養に資するを得べし著者が此書に名づけて「登高自卑」と稱するは決して偶然にあらざるなり

余常に以爲らく人は上帝を信じ之を拜すべきものなりと試みに天地萬有に充滿せる秩序と壯美とを看よ又試みに歴史と人心とに顯然たる正義と道德とを看よ虚心平氣なるもの誰か宇宙に力あり智あり又徳ある上帝の存在を認識せざるを得んや然るに世人動もすれば上帝を以て一種の迷信なるが如く或は單に主觀的理想なるが如く思惟す

何ぞ誤まれるの甚しきや吾人は信ず」もろくの天は神の榮光を顯はし穹窿は神手の業を示す」ものなることを又信ず」耶華和を畏るゝは智慧の初めなること」を如斯人は元來上帝を信じ且つ之を拜すべきものなるが又此の信仰に優りて吾人に安立と満足とを興ふるものはあらざるなり

余又常に以爲らく理性は宗教上最後の權能なりと吾人は思想の自由を以て神聖犯すべからざるものなりとなす然るに世の所謂宗教家の多くは或は教會を以て或は聖經を以て或は口碑を以て或は習慣を以て理性の判断を抑壓せんとす於是乎宗教は迷信と殆んど何の撰ぶ所なきに至る而して其結果は宗教と科學との衝突となりて兩者は共に非常なる損害を蒙むらざるを得ざるなり元來思想は信仰と共に自由なるべきものなるが宗教は常に理性を抑壓すべきものにあらざるの

みならず理性に違反して決して自ら安立し得べきものにあらざるなり

今や神田君の「登高自卑」は一方には上帝の存在を證明して人生の目的又宗教の性質に及ぶと共に他の一方には理性の神聖を唱道して教會聖經等が宗教上決して最後の權能にあらざることと説く余が此書を多とするは實に之が爲めなり余は「登高自卑」が大に世人を益すべきを信して疑はず常に思ふ所を書して序に代ふと云爾

丁酉臘月東京山吹町の寓居に於て

旭川 岸本能武太

登高自卑

例言

- 一 此の書は未だ宗教的事物に熟せざる人々をして余輩の信奉する宗教の一斑を知しめんとその目的を以て編述せるものなり然れども他の教會の信仰箇條或は教理問答等の如く一宗派の上より其真理たるを保障し又其隨信を強ゆるものに非ざるは勿論なり
- 一 此の書は初學の人をして了解に便ならしめんが爲め一々宗教的事物に關する問題を掲げ之れに簡短なる答案を附し以て登高自卑の一助たらしめんとす
- 一 此の書の用語は勉めて世間に普通なる言語を用ゐ其の比喩例證の如きは成る可く日常何人も熟知せるものを撰びたるを以て或は符節を合すが如く正適せざるものなしとせず讀者幸ひに其用

語と比喩の足らざるを補足するあらば編者の多とする處なり

一 此の書は博士クラーク氏、博士サザーニヤ氏、博士ヒックスビー氏
 及びマツコレイ氏等の著書論說講義等より其の材料を集め之
 れに聊か愚見を加へたるものなりと雖も其の答案の可否は固よ
 り編者の責めに任ずる處なり

一 此の書は聖人の表題下に於て釋迦、孔子、索克拉氏、耶蘇の四大聖人
 の言行を詳述す可きは編者が最初の目的なりしと雖も、印刷上の
 都合に依り只だ僅かに耶蘇の言行の一部を掲げ他日再版の時を
 期し其の缺を補ふべし

明治丁酉之歲晚 樂天堂主人識

登高自卑

目錄

神

神に就て	一
結局原因	二二
神の宮殿	二八
眞理	三五
證據	四四
天命	五六

人

人に就て	六一
意思	八四

習 慣

普遍なる生命

心霊の覺醒

理 想

人間社會

宗 教

宗教に就て

聖 書

神 托

信 仰

宗教的儀式

禮 拜

二

九 五

九 八

一〇三

一一〇

一一五

一二五

一五六

一六三

一六五

一七九

一八七

祈 禱

秩序と奇跡

死及び死後

靈魂不滅

福 音

道 德

道德に就て

良 心

義 務

惡 の 說

罪 惡

懲 罰

一 九 五

二〇二

二〇八

二一六

二二三

二二七

二四〇

二四五

二五三

二六四

二七三

三

赦罪

聖人

聖人に就て

耶蘇基督

神の化身

聖人の教訓

唯一教

主義

唯一教の起原及其の略史

唯一教と正統派基督の比較

結論

四

二八二

二九〇

二九四

三〇六

三〇九

三四六

三五五

三七五

四二八

登高自卑

○神

神に就て

問 宇宙間の事物を攻究するに當り、學者の最も確乎たる事實なりと認むるは如何なるものなりや。

答 宇宙間に在る學者の最も正確なりと認むる處の事實は、即ち引力、電氣等の如き力の存在と物質界を組成せる原子の實在なり而して此の力と原子は始終一定の規律により秩序的に運行するの事實を以て學者之れを夫則或は大法とせり然りと雖も此の等の事

神田樂天編述

實は其の力たり原子たり大法たるに論なく、其の真相本體に至りては盡く人の思想界即ち不可見界に屬するものにして何人とも之れを見るを得ざるものなり、故に宇宙間人の最も正確なりと認定せる事實は常に可見的よりは寧ろ不可見的圍範に屬するものたるべし。

問

答

科學は如何なる大事實を吾人に教示するものなりや。科學は吾人に宇宙の觀念をして完全ならしむるものなり、必竟此の宇宙とは至る處萬有の盡く相一致し、相聯關し、整然たる秩序完全なる組織體にして、天空の星宿より海濱の砂礫に至る迄で、盡く一定の法規の下に網羅せられ、僅微なる蘆埃と雖も亦宇宙組織體の一部分として過不及なく完備せるものなり、然れども淺近なる人々の肉眼には時として暴風地震等の如き、不慮の天災地殃の遇

問

答

發せるの故を以て反て此の宇宙は不規律の世界の如くに見ゆる事なしとせず、されども廣く此の宇宙の全體を綜合的に考察する時は、必らずしも其の遇然なるが如き事物の裡に、大々的必然の理由あるを發見するに難からざるべし。
肉眼を以て見たる事物と精神にて觀察せし事物と孰れか確實なりや。
精神は肉眼を以て見し處の事物を綜合し、以て之れに合理的解説を與ふるものなりと雖も、此の肉眼は時として事物の真相を誤報し、精神を欺く事少しとせず、何となれば肉眼は決して事物の真相を看破するものに非ずして、單に光線屈折の度を感ずるに過ぎざればなり、彼の精巧なる繪畫の如き、平面の紙上に彩色せるものなりと雖も、其の彩色にして能く光線屈曲の度を適宜に配置する時は

恰も其の繪畫に凹凸遠近あるが如くに觀ぜしむるものなり。之れと同時に精神は經驗即ち外界より肉眼、又は其他の方法によりて報告し來れる事物、即ち判断の材料の狭少なる場合に在ては、往々誤判に陥り、思想に流れ、肉眼のみに依頼して淺見に流るゝと同様の弊あるべしと雖も、之れに反して經驗多き精神の推測は何れも合理的解釋により、事物の真相を穿つ事を得るものなれば、精神的看察は寧ろ肉眼の所見より遙かに正確なるものなり。

問 科學は完全なる宇宙の秩序、即ち天則の他、更らに吾人に教示する處なきや。

答 科學は此の宇宙間、森羅萬象の物質は何處に到るも盡く同一なり。この理を吾人に教示す、故に吾人は之れに依りて近くは、吾人の身軀を組織せる物質と遠く蒼天の外に炳焉たる星辰を構成せる物

質も亦同一の物質たる事を知り得べし、斯の如く科學の吾人に教示する處の事實にして、眞實無妄ならしめば、此の宇宙間に顯現せる天則は何處に到るも亦同一の勢力の發現に過ぎずして、總べての法則の相協和一致して亂雜ならざるは、究竟此の勢力の唯一なるに非ずして何ぞや、其他精神と云ひ智力と云ふと雖も、等しく此の唯一なる力の顯現せる異様の状態に過ぎざるなり。

問 人は此の靈妙不可思議なる勢力、又は智識の上に如何なる名稱を附するや。

答 古來之れに付するに、人種と國語と人智の程度等の差異に依り種々なる名稱種々なる記號を以て之れを表章せりと雖も、就中其の最も普通にして、何人も引用し來れる名稱は「神」と云ふ聖き尊稱なり。

問 神なる名稱は、果して斯の如く單純なる抽象的人間思想の出立點にして、究極點たる、又時間と空間とを超越せる、宇宙の結局原因を表明するに、足れりや。

答 否、如何なる稱號も神の實相本體を表明し盡す能はざるを以て、吾人は便宜上今假りに此の名稱を付するに過ぎざるなり。

問 神と稱ふる名號は、何を以て聖き稱號なりや。

答 神と稱ふる名稱の下に、吾人は善良慈愛の意義を聯總するを以て神聖なりとす。

問 宇宙間果して善良と名づく可きもの現るゝや。

答 然り、秩序、法則、眞實、美妙、唯一等の事物は善良ならざるか、世に何人か此れ等の事物を觀じて善良なりとせざる者あらんや。

問 外界の事物の中、吾人の眼より見れば、反て不規律なるが如く、又醜

穢なるが如きものあるは如何。

答 人若し宇宙萬有の現象を深く攻究する時は、一見如何に不規律なるが如きものと雖も、必らず其の宇宙全體の組織上に一定の規律を以て存立せる、必須事件たるを知るを得べしと雖も、幼稚なる人智は未だ以て茲に到らざるが爲め、彼の道路の塵埃も亦引力の大法に従ひ、夕陽の光線を反射し、以て詩人を腦殺するが如き、秀美なる彩色を、西天に畫くの具たるを解せざるが爲めなり。

問 然らば所謂醜穢なるものは如何に見る可きや。

答 人智益々膨大となるに及んでは、其の曾て醜穢と觀ぜし事物も、終に其の感覺以外に放逐せられて、其の跡を止めず、宇宙間只だ美妙なる秩序と唯一なる善との殘存するを見ん、彼の蛟蛇の如き、蟾蛙の如きは、動物學者に取ては、反て美妙、不可思議にして、意匠に富め

る生物界の好材料、好教師、好標本たるものなればなり。

問

人類は太古より常に神を信仰せし者なりや。

答

古代に在ては今日の如く、高尚なる意味に於て、神を信仰せしに非ざると雖も、或る靈妙不思議なる神威力の存在を信ぜしや明らかなり。故に太古草昧の時代に在ては、日月星辰より、名山大川は勿論、其他種々異形のもの、を禮拜せり、惟ふに最初單に此れ等の物體に神事せしかども、漸次智識の發達するに従ひ、或る神威不可見の力は、此れ等諸物體の上に現象せるものとなし、此れ等の物體をば假りに禮拜の目的物となすに至れり。

問

此物體を以て、禮拜の目的物となすは、果して適當なりや。

答

人類は神を認識するも、或る程度迄では止むを得ず、假說的禮拜の目的物を要むるものとして、就中幼稚なる社會に於て、不可見的神

問

靈を實現し、之れを會得せしむるに當り、彼の廣大悠遠なる天、天、山川等の言語文章に勝るは明白なる事實にして、古來之れに依りて、神秘不可思議なる神を解釋したる、敢て怪む可きに非るべし、况や言語文章と雖も、人間の不可見的理想を表章する一種の方便的記號に過ぎざるのみならず、翻て彼の天、天、山川は、各々神威力の一部を吾人に示現せるものなれば、之れに依りて未熟の人智をして、悠久高大なる神徳を解釋するの用に充つ、蓋し不可なかる可しと雖も、此の天、天、山川を以て直ちに神靈の本體實相なりとするに至ては、大に吾子の意を誤解するものなり、何となれば、是れ吾子の頭髮の一を以て、是れ何某氏なりと云ふに等しければなり、吾子如何に微賤なりと雖も、豈敢て一毫の頭髮以外に、吾子の本體無からんや。

答

各種各部の人民は各々其の土地氣候等天然四圍の狀態の差異と、
 隨て各自の風俗の差異とによりて、信神の念甲乙相同じからざる
 ものにして、茫漠たる廣野に生活せし古代のエジプト人は、廣大無
 邊を觀じ、其の信念は深遠幽邃に富み、地中海半島にして恰も泉水
 の築山に住するギリキ人は、天然の絶景を觀じ、其の信念はエジ
 プト人に反して専ら有限界の秀美に富み、ローマ人は建國の當時
 より戦争により他國を制御するを以て、立國の要素とせるを以て、
 其の信念は組織的法制或は統一の念慮に富み、氣候温和にして衣
 食充足せし古代印度地方の人民は睡眠的安心を以て其の念慮の
 多分を占め、雪風膚を裂くが如き極北のスカンダナヴィヤ人の峻
 嶮なる山間に獵夫となり、或は怒濤の上に漁者となれる者の氣風
 は、自然勇猛にして、其の信念は猛烈なる雷神に在るが如く、人類の

問

信念は専ら其の周圍の境遇に相應するものなるを以て、甲乙各々
 異様の諸神を禮拜せり、加之此れ等の人種が甲乙争鬪を事とし相
 和せざるが如く、其の諸神も亦相互に嫉視せるものなりと信ぜら
 れたり。

問

答

如此古代の人種の信仰せし神は盡く善神なりしや。
 否な、或る神は實に恐る可き猛惡の性質を有し、或る神は温和可愛
 にして親む可く、或る神は平常温和なりと雖も、怒れば即ち猛獳に
 して之れに近づき、或は之れに抵抗すべからざるが如し、蓋し此れ
 等諸神の性質の差異は、之れを信仰する人種の性質の差異と相併
 行するものなり。

問

答

此れ等の諸神と當時の人民とは如何なる關係を有せしや。
 通例斯る草昧時代に在て、或る一の凶事其の社會に現はるゝ事お

問 爾時は是れ即ち悪神の處爲となし、或は善良なる事件の起る時は、即ち善神の恩澤なりとし、或は遇ま困難の社會に發生せし場合に於て、往々其の人種は彼れ等既往の行爲に遡りて反省し、往年或る一事を爲せしが爲め、恐くは何某神の怒を醸成するの根元なりと推究するが如く、其の社會に遇發する諸般事物を以て、多くは神の賞罰を直ちに人類に降するのなりとせり、故に其關係は恐る可き王者と其の臣隸との關係に似たる處あり。

問 古代の人種は専ら善神を禮拜せしや、將た悪神を禮拜せしや。

答 古代の人種は神の性質を以て善良と信ずるよりは寧ろ猛惡なりと信ぜし故、比較的に悪神を禮拜せり。

問 何を以て古人は神を以て猛惡なりと信ぜしや。

答 人智の幼稚なる時代に在ては、此の有益なる天然力を使用するの

法を辨ぜざるを以て、往々此の天然力の爲めに困められ、隨て之れを恐るゝ事、今人に百倍せり、彼の迅雷風烈地震火災の如きより飢饉困窮疾病老死等の事實を解釋するに際し、當時悪神の存在を認識するは至て簡便なる方法なればなり、加之古代の蠻民は甲乙互に干戈を交へ、甲若し乙を征服する時は、即ち乙人種の諸神をも共に征服せりと爲すを以て、被征服人種の眼より征服者の諸神を見れば、即ち彼れ等に不幸を來し傷害を加ふる所の悪神にして、斯る場合より往々他國の諸神を以て靈神、魔神、惡魔の代表者と認むるに至りし事例少なからず。

問 一神教の發端は如何。

答 人類は甲乙丙丁と漸次其の交通の區域を擴むるに及んでや、茲に甲乙丙丁各々信奉する諸神あるを見聞す、如此場合に於て、人は各

各自己の由來、自己の所信を他人の由來他人の所信よりも高等なりとして、自負するの性質を有す彼のアメリカの土人インヂアンは當時コロンバスが歐洲より軍艦大砲等を携帶し來れるを見て天國より降臨の天使なりと思ひ、物質的文明の高等なるには舌を捲きたるも猶ほ彼れ等には歐人等の夢想し能はざる神ありと自負せしが如きは、其の一例にして、何人と雖も自己所信の神は他人の諸神よりも遙かに秀逸なる者なりと信ずるものなるが故に、自國は諸國の首坐を占め自己は諸王の王たらん事を希望するが如く、自己所信の神は終に諸神の大神なりとの觀念に達せざれば止まざるものなり、然り而して後漸を追て此の自負心を増長し、終に自己所信の神以外の神の存在を是認せざるに至り、始めて一神教の端を發らき、人智の進歩擴大すると共に、神の觀念擴大し、其の屬

性をして益々高尚善良ならしめ、終に今日の如く絶對的神靈を認識するに至れるなり。

問 歴史上何れの國民は此の一神教の端緒を發きしや。

答 世界各國民族中往々一神的信仰を表白せし事實は、各國古代の文學中に散見せりと雖も、大凡西曆紀元前四五百年頃即ち猶太國豫

言者時代、歴史上明白に一神教を奉じて今日に至るも、猶ほ此の信仰を繼續せるは、猶太國人にして、今日泰西に在て盛大を極めたる

一神教は即ち此の信仰より發達せしものなり。

問 當時の猶太人は如何なる程度に於て一神教を奉ぜしや。

答 彼れ等當時の神は具體的一神にして、今日吾人の信奉せる靈性的

一神教に非れば、今日に比すれば遙かに劣等なる觀念なり。

問 猶太人當時の神と、時間空間との關係は如何。

答 彼れ等は此の蒼天を以て一個の堅實なる穹窿形の物躰なりとし、

其の穹窿の上に天國と稱する國土ありて、神は此の空間的玉座に

臨御し玉ひ夥多の天使聖者に侍かれ、其の天使をして神の欲する

處を行はしめ、或は時として此地上に降臨し玉ふ事ありとせり。

問 其の神は不可見の神なりや。

答 通例古代の人は神を以て具體的に觀念せるが故に、古代の猶太

問 猶太人は何處に於て彼れ等の神を禮拜せしや。

答 彼れらは都府ゼルサレムの宮殿に於て神を禮拜せり。蓋し神は曾

て此の處に特異の示現を垂下し玉へりとの口碑的傳説に基くも
のなり。

問 耶蘇は猶太國人の神の觀念に向て、如何なる新紀元を興へしや。

答 耶蘇は斯る社會に産れたるも、其非凡の天才は決して流俗の迷信

に満足せず早くも自國民の信仰の日に非なるを看破し、慨然とし

て當時の宗弊を論破し甘んじて時論の逆流に立ち大膽にも神

は聖なる神靈にして、不可見のなれば、之れを拜する者も亦須らく

靈と誠とを以てすべしと教訓し、又此の神は吾人々類の父た

れば、四海の民皆盡く同胞兄弟なりと教示し且つ時間空間を超

絶せる神靈は、サエルサレムのみならず、何處にても之れを拜す

問 耶蘇出生以後歐米兩洲のキリスト教國に於て、通例如何なる神を

信仰せしや。

答 通例キリスト教諸國に在て、近世に至る迄で、擬人的神即ち神を以
て人間の如き者となし、或る特殊の場所に於て其の居所を定むる

問

ものなりと信ぜられたり。

現社會に在ても猶ほ如此擬人的神の信仰を繼續するを得可きや

吾人は近世に至り此の宇宙間萬有の天性を發見するに及んでは

人間の如き具體的の神を信仰する能はざるなり如何となれば此

の物質界宇宙間、到る處神の生氣又は力神の聖靈又は眞理神の慈

愛又は正義の顯はれざる處なきを以て、此の宇宙間と共に空間的

制限を有する神の信仰を繼續するを得ざるなり。

問

如此萬有の間に神ありとするは多神教或は萬有神教に非ざるや。

答

多神教は世界に個々の諸神の存在を是認するものにして、萬有神

教は此の宇宙間の萬有を以て直ちに神なりとするを云ふ然れど

も吾人は大に之れに反し唯一神とは萬有の内外に遍滿到達し、萬

有の縁て來る處の根原を云ふ是れ恰かも吾人の生命即ち生活力

問

人は神を見能ふや。

答

然り吾人は此の宇宙間に現象する生氣或は勢力として常に神の

實在を認識するを得べし。

問

如此き觀察は果して神を見しと云ふを得可き價値ありや。

答

然り吾人は少くも自己の親友を見得ると同一の程度に於て神を

見るを得べし抑も吾人は自己の親友に關して確かに獲得し得べ

き知識は如何なる程度に於て之れを認識し得るや吾人は軀體の

大小容貌、 stature、眼色、膚色、毛髮、音色、衣服等より、彼れが過去の經歷も多少を知るを得可く、現在の意象、性質、智能、徳達の大略をも知るを得べしと雖も、是れ等は單に朋友の外部に現象するものゝ一部に過ぎずして、何人と雖も以上列擧せる事物は即ち吾人の朋友なりとの結論に同意するを得べきや、否な決して同意する能はざるなり、なにとなれば、此の結論は吾人の朋友なる名詞の上に朋友其の者の本體なる必然的思想を満足せしむる能はざればなり。是れ他なし吾人は如何に其の朋友と親密なるも、彼れの裡に在りて、決して他人の觀測を許す可からざる生命の秘蘊妙處に至ては、已でに吾人の知らざる別世界なり、未航の大洋、未觀の大陸なり、故に彼處には吾人が眼の遠く及ばざる星辰もあらん、然りと雖も是れ單に吾人の朋友に於てのみ斯く、吾人は無智なるに非ず、動物にあれ植物

にあれ、或は生物にあれ、死物にあれ、盡く同一にして、又神に於てせ實に然らざる可からざるなり。極言せば吾人の智識は總て此れ等の事物の本體實質より發射する光明を間接に五官の上に表現せしめ、茲に始めて推理的想像を畫くに過ぎざるべし。然るに今日我れは我が友を知る、又我れは金石草木を知れりと云ふも、誰れ人も之れを怪むものなきに、事宗教の圍範に屬すれば、世人は卑屈にも我れは神を信ず、又何々あるを信ずと云ひ、宗教界の事物に知の字を全然否認するが如きに至ては、實に思はざるの甚だしきに非ずや。

問 何を以て神を天父と稱するや。

答 吾人は無限の神靈に類似せる有限の心靈を有するを以て、道徳上人は神の愛兒なりと信ずるが故に、神は人類の天父なりと云ふに

過ぎざるなり。

問

神は吾人に遠きものなりや。

答

古昔は神を以て恐る可く、又親む可からざる、或る王者の如くに信ぜしを以て神は蒼々たる天空の上にありとせり、然れども近世に至りて其の信仰全く一變し神は吾人に近く在し玉ふ事、肉躰の親子兄弟も只ならざるが如し、何となれば神は此の宇宙間に遍満し玉ふものなるを以て、吾人は神の裡に起居し神の生氣を呼吸して生活する事、恰も魚の水中に游泳し呼吸するが如し。

問

キリスト教國に在て偶像を拜するを禁ぜりや。

答

キリスト教國に於ては勿論偶像を神とし禮拜するを禁ぜりと雖も、實際に於て神ならざる者を(耶穌の如きマリヤの如き)禮拜するは是れ神の外に神ありとするものにして、是れ只だ物質を以て造

ると妄想を以て擬造するとの差異あるのみにして、亦一種の偶像禮拜と云ふを得べし。

問

天則とは如何なるものにして、何處に於て之れを發見し得べきや。

答

天則とは神の聖旨にして、宇宙間何處に於ても自然界の法則として、物質界精神界の間に普く行はるゝ法則を云ふ、然れども世俗の所謂神の意旨は單に特殊の教會内、又は經典のみに示現せるものと爲すが如きは、必竟野蠻時代の遺物として、偏頗狹隘なる妄執に過ぎざるべし。

結局原因

問

海濱に散布せる砂礫は最初より斯くの如き形狀を以て存在し、又

永久不變なるものなりや。

答 否、此の世界は變化の常則にあるものなれば、砂礫の微と雖も最初より斯の如き形狀に非ず、又永久不變なるものに非ざるなり。

問 然らば彼の砂礫は如何なる歴史を有せるや。

答 或るものは火山石或るものは水生岩の大巖が寒熱濕氣空氣等の作用に依り、數百千年の後ち風化して粉碎せられ、高所より低地に墜落し、雨後の出水に押し流されて溪流に降下し、漸次大河に出でて終に大海に入り、再び波濤の爲めに海邊に押し上げられたるなり、抑々最初粉碎せられたるや、石片各々圭角を具へ凹凸不整なるも、漸く溪流に下るや、甲乙相互に磨擦し、其圭角は漸次鈍角となり、凹凸も亦隨て減じ、其の波濤の強大なる海洋に入るや、一層磨擦力強大なるを以て、殆んど圓形となり、一つも原形を存するものなき

に至れるなり。

問 吾人は彼の砂礫に就て猶ほ攻究を要する處ありや。

答 然り、吾人は斯る歴史を有する砂礫の原因は、火山石或は水生岩の大巖なりとの事實を知ると同時に、此の大巖は果して如何なる原因により、斯く存在せしものなりやを知らん事を要す。

問 彼の大巖の斯く存在するは、物質界の理化學的引力が一定の比例を以て其の巖となる可き原子と原子を吹引し、結合せしめたるに依るとの答案にて満足なりや。

答 否、吾人は更らに其の引力とは、果して何物なるやを問はんと欲す。

問 物質界の原子と其の理化學的引力とは、已でに天地と共に無始に存在せりとせば如何。

答 果して然らば、尙ほ如何なる者に依りて、如此く秩序井然たる法則が、恰も一部分の全体に於けるが如き、關係を以て、各々適宜に運行し得るかとの問題を發するの止むを得ざるに至るべし。

問 此の最終の問題に向て、如何なる答案を以て適當なりとするや。

答 吾人は此の宇宙間の萬象をして、唯一に歸着せしむる處の、結局大原因即ち必然的に思想と感情とを有する神の實在を認識せざる可

からず、斯くの如くして吾人は眞に此の物質界宇宙を以て、神の意

思を現象し、引力或は勢力は神の感情を標示し、而して此の天則は

神の高大なる思想を發現せしものなりと云ふを得可し。

問 神は猶ほ他物によりて創造せられしやを問ふの必要ありや。

答 否な、之れを問の必要なかるべし、何となれば吾人の所謂神とは無

始無終と完全圓滿との意を抱括するものなるが故に、無始無終の

者は創造の始めなきと同時に、完全圓滿なる者は、必然的に實在の屬性を具有する者なるを以て、吾人の思想は必らず神は實在にして常住なりとの結論に到達せざる可からざるを以てなり。

問 人間思想の法則は、神以外の勢力、其他諸々の力に依りて、此の宇宙

は創造せられたりと認識し能はざるや。

答 否な、「唯一」と云ふ理想と、宇宙創造との思想は結局原因、即ち自在常

住なる神の觀念を離れて、合理的に推測し能はざるべし。

問 吾人は永遠無窮の物質の原子は、各々相互に此の宇宙を組織すべ

く同意せしものなりと承認し得べきや、或は又此の原子より、吾人

の思想、自覺、良心、情緒、感情、意思等と名づく可き、心理的現象は盡く

發生せりと會得し得べきや、

答 否な、吾人は斯る解釋に向て満足する能はざるべし、今假りに數歩

を譲りて物質の原子より此れ等の現象を發生せしものなりとするも、是れ竟に物質の原子を以て、或る種の諸神なりとするに等しきものにして、萬有神教が人間思想の法則と調和併行せざる限り到底此の説の確立を望む可からず。

問 人間の理性は宇宙の結局大原因の他更らに需むべき處なきものなりや。

答 吾人の理性は、此の宇宙に相應せる目的を知らん事を要するものにして、換言せば如何なる目的を以て、宇宙は斯くの如く現存するやとの問題を起すべし。

問 神なる理想は此の問題に向て如何なる答案を與ふるを得べきや。

答 吾人若し此の神は其の仁恵を此の宇宙間に垂現し玉へりとせば、如何に此の宇宙は至當善良なる目的を以て成立せるかを了詳す

るに難からざるべし、故に吾人は森羅萬象を以て、盡く善良の方嚮に向て進行するものなりと信ず。

問 萬有は一旦善良ならざりしが、漸次善良の方嚮に進捗し、隨て神も亦次第に善良の方針を撰びしとするものなりや。

答 否、神は常住不變なりと雖も、只だ人智は漸次成長するものなるを以て、宇宙の萬象は盡く善良の方嚮に進捗しつゝあるが如く見ゆるに外ならず、是れ恰も航海に馴れざる者の眼に、船首に見ゆる水陸は其の船に反對の方嚮に流下するが如くに感ずると一般にして、必竟自己の進行するを思はざるに他ならざるなり。

神の宮殿

問 抑も人間の生命と稱するものは、如何なるものを云ふや。

答 吾人の生命とは人々自ら恣に之れを創造し得べきものに非ざるべし、惟ふに神の聖氣、吾人の裡に在て箇人的活動力の中心點となり、吾人は之れを呼で生命と云ふ。

問 人間の思想、感情、意思は如何なるものなりや。

答 吾人の思想は即ち神の聖氣、吾人の裡に在て箇人的思念の光明を放つもの、換言せば、吾人の生命即ち活動力が自然界の大聖典に記録せられたる普及的大思想を縮寫せるもの、之れを吾人の思想と云ひ、仁慈愛情と稱する。觀念に感觸して、吾人の心中に發芽するもの、之れを感情と云ひ、又吾人が善意と認むる處の事物に依りて興

奮せられたる發動力を意思と云ふ。故に吾人の生命、思想、感情、意思は盡く宇宙的大勢力即ち神より直接の恩賜なりと云ふを得可し。何を以て吾人は生命、思想等を他の人間より得たりとする能はざるや。

答 如何となれば吾輩は、他人即ち父母師傅、發明者、聖人等より、此れ等の事物を教示せられたりと假定するも、猶ほ此れ等の人は究竟何人より之れを得たりとするか、是れ他なし吾人の先人は天地自然の結局原因即ち神の訓示を蒙りし者たらざる可からざるなり。然らば誤謬ある思想、感情、意思は決して有す可からざるの理なるも、此の世界に於て斯る誤謬の事實少なからざるは果して如何なるものなりや。

答 尤も現世界に於て如此誤謬は免かれざる事實なりと雖も、人間萬

事盡く誤謬なるに非ず況や人類は猶ほ未だ發達の中途にも達せざるものなるに於てあや、之れが爲め屢々宇宙の大典を誤解し無邪氣にも斯る誤謬に陥るものと知るべし。故に神の聖氣の光明は人類現時の狀態に於ては箇人的に潜在し未だ以て圓滿なる光明を放つに至らざるものなり。

問 神は何處に存在するものなりや。

答 神は神の力の(聖旨)顯はるゝ處には盡く實在する事、恰も吾人は吾人の思想の顯象する處に吾人の存在するが如きものなり。

問 然らば如何なる場合に於て神を認識するを得可きや。

答 此の宇宙は神の思想、愛情、意思の現象に外ならざるを以て、少くも吾人は此の森羅萬象を知れる程度迄では確かに神の實在を認識するを得可べしと雖も近くは吾人自己の内界に於ける宮殿に、

心となりて光明を放散するを感識せば、其處に又神の鎮坐するを認め、或は神の大なる感應を蒙れる高尚廉潔なる士君子の行爲に於て、或は親友の可愛の眼より迸出する愛情の裡に於て、茲に神の鎮坐し給ふを認識するを得べし。

問 神の屬性とは如何なるものなりや。

答 神の屬性は吾人之れを合理的に想像せば唯一にして、無始無終なり、原因にして生命なり、仁愛にして純粹なり、而して此の宇宙は唯一なる天則に準據して、無始より無終に迄で活ける因果の理法により、仁愛と生命の方嚮に向つて進行しつゝあるものなり。

問 神を以て箇人的に思考するは不定理ならずや。

答 神は絶對無限なり、故に相對的箇人たるものに非ざるなり。然れども神は箇人的性質を全く抱容するの餘地無きに非ざるや明かな

り故に吾人は便宜上神を以て箇人的に思考するも敢て差支無きが如し、是れ決して通俗の擬人的神論に非ずして、單に神は實在者として之れを箇人的に假想し、又人は其の高尙なる天性に於て神と相類似せるものなりとの思想を應用せしに過ぎざるなり、何となれば人の思想は確かに神の思想に反應し、神の仁愛は人の愛心に反響するものなりと認識せるを以てなり。

問

此の他神の屬性に關し吾人の知得せし處あらずや。

答 神の廣大幽玄なるは吾人得て測り知る可からず其の踪跡は得て索ね難し(ローマ書十一章三十三節以下)神の大智と大能とは人の内外兩界に顯然たる一々之れを枚擧するに違あらず吾人は只だ詩人テニソンの一語を以て之れを終へん。

“Flower in the crannied rock.”

(花咲くや巖の破れ目に神の影)

眞理

問

眞理を談ずるとは如何なる意味なりや。

答

眞理を談るとは吾人の言語文章正しく世の事實と認むるものと相一致するを云ふものにして、通例眞理を談るとは單に自己の言語文章は自己の思想と相一致する場合をも斯く云へり。

問

太陽は昇ると云へば眞理なりや。

答

人若し太陽は昇るものなりと思ふ場合に在て、之れを昇ると云ふは通俗に所謂眞理なるが如しと雖も之れ必らずしも純然たる眞理に非ざるべし、何となれば吾人は寧ろ太陽の昇るに非ずして地

問 球が太陽に向て回轉するものたる事實を認識するを以てなり。若し人ありて石炭は黒しと云ふ場合には、眞理を談りしものなりや。

答 斯る場合に於て、吾人の思想が石炭は黒きものもと考へしものにして、認識と言語の一致せる限り之れを眞理なりと云ふを得可し。然れども果して何が石炭を黒くならしめたるやを知悉せず、單に吾人の五官と石炭と相感觸するの結果として、其物は黒しと云ひしに過ぎざれば、是れ果して絶對的に眞理なりとは斷言し能はざる處なり。

問 然らば、所謂眞理なるものは如何なる程度に於て、確定せらるゝものなりや。

答 眞理は總べて吾人の思想、即ち不可見的秘密界に於て翻譯せられ、

人間の思想と相對照したる後、始めて確定せらるゝものなれば、其の標準は人智即ち思想發達の程度と相伴ふものたるなり。

問 科學的眞理とは如何なるものなりや。

答 吾人を類は思想界の法則として、日常看察する事物の部類、秩序階級を整理し、以て自己の智識の統一ならん事を欲望するものなり。故に甲乙丙丁と事物の異動を辨識し、尙ほ此の裡に一貫の秩序整然として亂雜ならざるを證明するもの、之れを科學的の眞理と云ふ。

問 何をか眞誠なる推理と云ふや。

答 總べての事實が思想界に於て、秩序的に相一致するを證明する之れを眞誠なる推理と云ふ。換言せば、如何にそれ等の事實が相結托し得たるかとの合理的解釋を云ふ。彼のコーパルニカスの推理は

眞誠なり何となれば其の推理は彼の事實と吾人の思想とを確かに結合せしむるを得可ければなり。

問 如何なる理由により、森羅萬象を抱括する者は唯一なる宇宙と論断するを得るや。

答 吾人は萬象を抱括するものは唯一なる宇宙なりと断言するを得可し何となれば宇宙間の森羅萬象は其の種々雑多なるに關らず、其の部類と秩序とは整然として吾人の思想界に於て、盡く適合歸一するを以てなり、是れ恰も同族の親戚が彼是相助けて一團を爲すが如く、吾人の思想界に於て甲の事實は能く乙の事實の解釋を助け、乙は又丙を助け、其間に一種融通的眞理の貫くあるを以て、吾人は之れを唯一なる宇宙と断言するに躊躇せざるなり。

問 茲に或る一個の事實ありて、他の事實と秩序的に相關係せざりし

時は如何。

答 如此場合に於て、吾人は未だ其の新事實と他の事實相關聯する所以を知らざるに坐するものなれば、直ちに之れが眞理の所在を發見するを奨勵すべし。

問 茲に總ての事實を或る推理の下に結合せしめ得ざる事ありとせば、如此推理或は考案は果して如何なる推理に屬すべきや。

答 斯る場合に在て、吾人は此の推理を以て未だ完成せざるものとし、或は尙ほ未だ眞理に徹底せざるものとすべし。

問 今若し或る事物は、果して如何なる用あるや判然せざる場合に於ては如何。

答 吾人は他日其の用法即ち之れに關する眞理の發見せられん事を企望す、何となれば從來不要有害なりとせられし事物と雖も、今日

に至りて日用必須の事物と變じたるもの實に少々に非ざるを以てなり彼の天文學者として世界に雷名を轟かせしクプラーは諸遊星運行の法則を發見せし時に於て「オ、神よ余は爾を追ふて爾の思想を考へし」と云へり如此吾人は不斷神を追ふて其の思想を考究する時は未知の眞理を發見し得べき望は敢て空中の樓閣を望むの類に非るや明かなり。

問 人類の最も高尚なる理想とは如何なるものなりや。

答 最も高尚なる人類の理想とは此の唯一なる宇宙を組織せる種々雑多の事物が如何に神聖に、如何に秩序的に、相一致せるかを看破し、神の大思想は其の御衣たる萬象の上に顯然たるを稽首して考究せし結果を云ふ。

問 神の大思想は如何なる理由によりて、攻究し能ふべきや。

答 人の精神即ち智識は常に神の聖旨と並行して悖らず、換言せば人は神と相類するの心靈を具するを以て、神の大思想を追究するの望あり、故に人の心弄は眞に神の大旨を反照すべき鏡面たるを得べし。

問 此の宇宙にして、若し唯一ならざる時は、果して何處に於て高尚なる眞理を認識するを得可きや。

答 若し此の宇宙は唯一ならず、又確かなる意味なきものたらしめば、彼の萬象に秩序なく、恰も暗中に黒牛を探求するが如くにして、他眞理ありとするも、吾人は之れを智覺すべき法なかるべし、彼の數理なるものは、單に地上のみに行はるゝ法則とせば、吾人は如何で茫漠たる大洋を航海するに當り、天外の星宿を數理に依て觀測し、以て航路の安全を保するを得可けんや。是れ他なし、地上の數理能

く天外の星宿と一貫する大道存ざるを以ての故に非ずして何ぞや、故に吾人は此の世界を以て嚴格なる神の圖書なり又聖典なりと云ふを得可し。

問 外界の宇宙に畫ける事物、中其最も緊要なるは果して何物なりや。

答 外界の事物中、其最も緊要なるものは、決して彼の變遷究り無き外看的^{くわんてき}事物に非ず、反て其の裡面に在て吾人の心靈の讀み得る處の大思想^{だいしつごう}なり、而して此の思想は常住^{じやうじやう}にして不變なり。

問 外界の事物即ち此の物質界は、果して確實信據すべきものなりや

答 然り、外界の事物は吾人の心靈の附屬せる一般思想世界の秘運^{ひうん}を具體的に發表^{はつぱつ}せるものにして確實^{かくじつ}なり。

問 人の精神と肉躰との關係如何。

答 人の精神と肉躰は共に宇宙の大思想即ち神の力の現象の一にし

て、互に密接^{みつせつ}なる關係を有し、精神は肉躰によりて益々其光明を發するを得るが如く、肉躰も亦精神に依りて其の統一^{いついつ}を保全^{ほぜん}せらるるものにして、虛弱^{きじやく}なる肉躰は大に精神の活動力を滅殺^{めつせつ}し、又異常^{ひじょう}なる精神の感動は往々肉躰の統一^{いついつ}を失はしむる例^{れい}少しとせず、然れども強て其の本末^{ほんまつ}を論^{ろん}ぜば精神は本にして肉躰は末なる事、恰も宇宙の大思想は先^{まへ}にして現象は後なるが如し。

證據權^{しやうこけん}

問 如何なる種類の事物を以て之れを確實なりと云ふを得べきや。

答 吾人は自ら之れを経験^{けいけん}し、若くは立證^{りつてい}し得べき事物を以て確實なりと認識^{にんし}するを得可し、斯の種の智識^{ちしき}を以て吾人は之れを第一の

智識と云ふ。

四十四

問 斯る第二の智識は誤謬なきものなりや。

答 斯くの如き智識は、往々誤謬に陥るの機會を有するものにして人の五官は時として外觀に欺騙せられ易きものなり。

問 如何なる能力に依りて、吾人は斯る誤謬を免かるゝを得可きや。

答 吾人は其の五官より報告し來れる事物の上に、道理心なるものを應用し、之れが是非を裁決するを得可きものなり。

問 道理心なるものは如何なる判断力を有するものなりや。

答 吾人の道理心は、此の世界を以て、秩序的の宇宙(唯一)とす、故に總べて正確なる人間の思想は、盡く之に適應一致せざるべからずと判定す。

問 道理心は如何なる作用を有するものなりや。

答 道理心は萬有を以て盡く秩序的唯一に適應し、一致せしむるもの

なり、故に吾人は此の道理心の作用に依りて、宇宙間に羅列せる神の思想を讀み解釋するを得可し。

問 道理心は常に何を拒絶するや。

答 道理心は何事に關らず、總べて不合理荒唐無稽の事物、或は兩者正しく相反せる事物を以て、兩ながら之れを正當として承認するを拒絶するものなり。

問 人の道理心なるものは決して誤謬なきものなりや。

答 完成せる智識を具する人の精神は全く誤謬に陥る事なかるべしと雖も、普通一般の人心は時として誤謬に陥るを免かれ難き者なるべし。

問 人は斯る誤謬を免かれ、何れの程度に於て正理を確認し得るや。

四十五

答 人は各々他人の道理心を尊重し、補助し、總べて人類の間に蓄積せる智識を網羅し、最も賢聖最も良智に富める先輩の道理心と自己の道理心との符合せる事實を發見するに依り、始めて吾人が神に於ける認識、即ち自己の正理を確認するを得可し。

問 吾人の道理心の確定する處と他人の確定する處と相一致せず、正に反對せる場合に於て如何にせば可ならんや。

答 斯る場合に當ては、吾人は先づ相互の意義を猶ほ能く了解せん事を勉むべし、斯くて吾人は屢々従前に勝れる道理あるを發見し、或は又如何に甲乙の議論の内、其の一方は正理に違反せるかを發見するを得べし。故に斯る場合に在ては成る可く皮層の我見を去て、公平に双方議論の深層を研究するに非ざれば、敢て其の結論を急ぐ可からず。

問 如何なる智識の種類を以て、第二の智識とするや。

答 吾人は研究の順序として、未だ曾て實視せし事なき事物と雖も、他人に依りて既に實驗し立證せし所の智識あるを認識す、斯の如き智識は他人の實驗、他人の立證を通過して、吾人に傳來せる歴史の如きものにして、即ち之れを第二の智識と呼ぶるを得べし。

問 事實の證據とは如何なるものなりや。

答 吾人は自ら之れを實視せしと同様なる確證は、吾人をして其の事實を信用せしむるを得べきものにして、彼の「ウラナス」遊星の存在に就ては、米國ハーヴァード大學の天文學者の學說を以て正當なる證據とするを得べし。

問 如何なる方法によりて證據の正當なると、不當なることを區別し得るや。

答 吾人は何物が果して正適なる證據なりや否やを確定せんが爲め
 吾人は各自の道理心を使用せざる可からず譬へば吾人の道理心
 の法廷に於て今日の天文學者の處論を以て太陽又は諸遊星に關
 する事物の證據なりと認むるを得べしと雖もリツチモンド市の
 シヤスパーの如き或は佐田介石氏の如きは此の世界を以て回轉
 するものに非ずとし或は天圓地方の辟説の如きは以て正當なる
 證據と認定し能はざるが如し。

問 如何なる人の資格は又徳義上事實の證據たるを得るものなりや。
 答 誠實正直公明潔白無私廉節は徳義上の正確なる證據とするに足
 らん然れども之れに反して空想固執偏見或は過大の言論を弄す
 るの習慣は大に道徳上證據資格の欠乏を反證するものなり。
 問 宗教的事物に關し最も正適なる證據は多く何に依りて得らる可

きや。

答 吾人は善良にして公明潔白にして思慮深く且つ宗教的事物と共に
 に世間の事物を深く攻究せし人の言論と行爲に依りて正適なる
 證據を發見する事あり。

問 斯の如き人々の宗教上の意見は常に相一致するものなりや。
 答 其の意見は通例大同少異なるものにして少くも或る最大理想最
 大要件は單純なるものにして必らず同一の歸着點を有するもの
 なり。

問 神の聖思即ち眞理或は事實なるものは人間の感覺力と道理心と
 を措き他の方法を用ゐて曉り得可きものなりや。
 答 世の或る人々は神が自己の聖旨即ち眞理を或る人間に直接或は
 特別例外の方法によりて示現するものなりと信するが故に此れ

等の人々は他人を教ゆるに當り已で自ら正確なる證據權を有せるものなりと信仰せり然れども今日吾輩は斯る論證を眞面目に論ずるを以て最早兎戯に類するが如くに觀ずるを以て敢て之れが適否を説かざるも讀者已でに覺る處あるべしと信ず。神は古來科學的眞理を人間に訓示するに當り斯る特別例外の法を以て授けられたりと信ずる者ありや。

問

答

否な衆人一様に斯は妄想せざりし然れども事の宗教に關する場合に在てのみ斯く例外の例、理ありと信せられたるは決して公平なる見解として見る可からざるのみならず、反て斯る淺薄なる宗教家こそ憫然に耐へざる次第にこそあれ。宗教的事物を以て神の特例によりて、人世に附與せられたりとす。論者を何と呼び做すや。

問

答

斯る人々を起自然論者と云ふ蓋し斯る理法は普通一般の理法外に逸脱せるを以てなり時としては又之れを奇跡論者とも云是れ天然自然の通則外の事情を正實なりと信認するを以てなり。

問

今若し或る特別例外の方法によりて示現せられたる眞理ありとする時に當り果して其の要求は正當なりや否やを判定するには如何なる方法に依る可きや。

答

斯の如き例外の要求は果して正當なりや否やを鑑別するに當り吾人は之れを各自の道理心に訴へ之れが裁決を待つ可きものにして、道理心は須らく其の證據條件は特別例外のものなりや否やを確定し次に此れより來る眞理と他の眞理と齟齬せざるや否や次に斯かる特別例外の證據は果して或る事實を證明するに於て非常に緊要非常に必須のものなりや否やを確定し始めて之れが

結論に達するものなり。

問

宗教的真理、即ち證據權は斯の如く超自然的示現によりて來れりと論ずる人々の議論は、必らず常に相一致せるものなりや。

答

人間社會の事實は止むを得ず此の問題に向て否定的答案を供給せり、最も強情に超自然的證據權を信奉せる人々の信仰は、容易に合同一致せざるのみならず、反て超自然論に就て有名なる學者の議論は、比較的確かに我他彼是にして、往々其の衝突を頻繁ならしめ、一致の氣運を阻害するものなり。然れども吾人は宗教真理も、亦他の學術の真理を論證すると等しく、天然自然の法則に準據す可きものなりと主張するを以て、天然自然の事實は常に吾人の如く宗教を科學的に研究する者を誘導して結局同一の議論に歸着せしむるものなり。

問

所謂真理の由來する處如何。

答

總べての真理は盡く神即ち宇宙の大靈智者より其の源流を發せざる可からず、果して然らば同一の神は科學的真理を以て超自然的に默示する事なきに、何を以て獨り宗教的真理のみをば自然的に訓示せざるの理あらんや、夫れ神は其の聖旨を其の御衣なる萬象に表章せり、人若し斯る高大なる神勅を以て日常思慮言語動止の規矩とせば、又何を苦んで他に超自然的の默示を仰ぐの要あらんや。

問

前論の如く、總べての真理は盡く神の聖旨を發現するものなれば、宗教的真理を以て、他の科學的真理よりも神聖なりとするを得べきや。

答

否な、是れ等は盡く同等ならざる可からず、何となれば此の神聖な

る宇宙は、總べての眞理を以て構成せられたるものなれば、其の眞理に甲乙なき事、恰も手足の人身に於けると一般なり。若し之れに甲乙ありとするは、彼の手は人身の上部に在るを以て自ら尊貴なりとし、反て下部に在る足の爲めに支へられたるを忘るゝに等し。又彼の鐵拐ヶ峰は富士の最高峰なり、然れども之れをして最高たらしむるものは、反て富士の脚下に在て、人の注目だに得ざる裾野の土砂たるを知らば、科學的と宗教的たるとにより、神の大思想に甲乙あるの理あらんや、只だ古來人間社會の慣習上甲乙あるが如くに妄想せしのみ。

問 吾人の思想界と、外界の自然物との關係は如何なる状態を以て相關係するものありや。

答 是れ恰も或る文章の意味と、其の文字との間に於ける關係の如し、

夫れ文字は文章の意味を表示するの助たれば、文字を離れて文章の意味を推し難く、又意味なき文字の羅列は終に文章たる能はざるべし。

問 超自然なる文字は如何なる意義に於て用ゆべきものなりや。

答 吾人の精神界即ち内界の事物は、外界即ち物質界の事物より超絶せりとの理想を表示するが爲めに用ゆ可き記號にして、決して理外の理、或は不合理視すべき理屈の上に濫用すべき符號に非ざるなり。

問 何者が宗教の最終證據權なりや。

答 人間の道理心即ち神の思想を反射する處の人間の合理的、且つ健全なる思想は、宗教の最終證據權たらざる可からず。

問 如何なる地盤の上に於て、神の實在を確認し能ふや。

答 吾人は神の實在を確認す。何となれば人心に在て唯一なる神の思想は、宇宙の唯一萬象の聯關人心の一致等の如く明白にして、而かも高尚なる事實と相併行一致するを以てなり、故に曰く、人心に於ける神の概念は、宇宙の事實と一致し、以て吾人の道理心を満足せしむるを可得き唯一最大の眞理なり。

命天

問 物質界の秩序なるものは、何處迄でも整然たるものなりや。

答 科學者の證明する處に依れば、物質界の秩序なるものは、眼前の事物は勿論大にしては、天空に燦爛たる太陽、恒星、遊星より小にしては、顯微鏡的動植物界に至る迄で、盡く整然たる秩序を具ふるもの

なるを以て、世に『秩序は天の第一の法則なり』と云ふ、この法則の存する所以なり。

問 耶蘇は曾て當世の人に告げて、『汝等の髮の毛だにも盡く數へられたり』と云ひしは如何なる意味なりや。

答 是れ神は其の子女たる人類を思ふの情深切懇到なるを訓示せしものにして、吾人の毛髮の一筋だに、神の聖旨の普ねからざる處なきを證言せしものなり。

問 外界の物質及び内界の心意は如何なるものによりて支持せらるものなりや。

答 外界の物質は盡く神の聖き力即ち科學者の所謂引力と名づくるものによりて成立し、内界の心意は即ち神の仁愛によりて成立するものなり。

問 所謂天命とは如何なるものなりや。

答 天命とは神の無始無終にして、一定不變なる意思を云ふものにして、吾人は茲に其の狭き意味に於て、特に人事上の運命或は人事上自然の約束を名つけて天命と云ふ。

問 古代の人類は天命を如何に解釋せしや。

答 古人は此の天命の圍範を以て、極めて狹隘なるものゝ如くに想像し、特に或る人種或る一箇人或る階級の人々の上におのみ、神の恩寵の豫約ありしが如くに解釋せり、茲を以て天命とは或る偏頗なるものなりとの結論に達するの止を得ざるに至らしめたり、然りと雖も吾人の所謂天命とは、決して如此狭小なるものゝ謂に非して、大は此の荒漠たる宇宙に遍滿せる神の大聖旨にして、少くも此の人生を未來永劫に誘導し給ふ神の大慈悲心なり。

問 何を以て天命は偏頗なる可からざるや。

答 古人の想像せしが如く、天命は如此厚薄ある可きものに非ずと雖も、只だ人智發達の程度に依り其の觀察點に高低あるを以て、如此誤謬に陥りしものなるべし、されども之れを以て直ちに天命は如此頗偏なるものなりとするは、蓋し不當の速斷と云ふべし、何となれば物質界に在て行はるゝ處の秩序は、黄金と泥土とに厚薄なき限り、身軀髮膚の色彩状態、即ち人種の差異により神の眷顧に厚薄ある可からざるや明なり。

問 天命に於ける古人の觀念と、今人の觀念との區別は如何なるや。

答 古人は天命を以て或る大工は其の工場に散亂せる木片と鉋屑とを以て、只だ己が最愛せる子女にのみ與へ、以て彼れ等が遊戯の具となさんとするに比したり、然れども今人は恰も成長せる子女が、

盡く父の鋸鉋を使用する方法を學び而して後其の工役を助くるが如きものなりと觀察せり蓋し甲は神の作りて備へられたるものを或る一二の者が受領するものと觀じ乙は子女たる者盡く天工を補佐し以て各自の運命を作爲せんとするものなりと觀じたるものにして吾輩は寧ろ乙者となり造化の協力者となり此の智と情と意と肉躰の筋力とを以て天地の化育を賛けん事を企望するものなり



○人

人に就て

問 抑も此の地球は幾許年の古より存在せしものなりや。

答 吾人の生活を營む所の此の地球は幾億萬年の古より存在せしものなりやは到底人智を以て測り知らる可きものに非ず。

問 此の地球は太古より常に生物の居住せしものなりや。

答 否な科學の教ゆる處によれば此の地球創造の當時は火炎の一團にして其の冷却して生物の居住に適する時代に達するにも亦幾億萬の年月を経過したるものなり。

問 人は此の地球上に在て生物界の先登者なりや。

答 否、恐くは蠢爾として水中に生息する最下等の海月様の生物は其の先登者たるべし、之れより稍や後ちに至りて魚類を生じ、次に水陸并生動物、次に鳥類、次に哺乳動物にして、人類は其の哺乳動物の最後に産出せしものたるべし。

問 人類は幾年以前より此の地上に産出せしや。

答 人類の起原も亦確然其の年月を答ふる能はざるも、目今科學者間の信す可き説によれば、大凡今より十五萬年乃至三十萬年前より人類は此の地上に生息せしもの、如し。

問 然らば其の當時、人類は特に蘆土を以て創造せられたるものなりや。

答 否、人類は下級の動物より、數百千萬年の間に漸次に進化し來り終に人間と名づく可き地位に迄で昇進せるものなり。

問 然らば、當時の人間は未だ完全ならざりしや。

答 然り、當時の人間は僅かに下級動物の域より一步高等なりしのみにして、未だ完全なる人間たらざりし。

問 然らば、人は其の以來如何に進歩せしものなりや。

答 其の進歩は實に異數にして、今日の最も進歩せし人間と、當時原人時代の人間との差別は、原人時代の人間と下級の動物との差異よりも遙かに著大なるものなり。

問 普通キリス教會にて、所謂人類の墮落説は信ずるに足らざるや。

答 抑も人類の進歩は確然たる事實にして、間然すべきものに非されば、古人の口碑によりて此の如き著明なる事實を抹殺し得可きものに非ず、何となれば人類歴史の開始以來未だ曾て今日の如き、人智の高尙なりし事あらざるなり、故に吾人は人類を以て全然墮落

問 せる者に非ずとなし、反て大に進化開發せるものなりと信ず。
人若し他人を目撃する場合に當り、如何なる思想を喚起するものなりや。

答 吾人若し他人を目撃するや、第一其の人の顔色形態衣服より總べて其の人の外面に現はるゝ事物の上に、自己の思想を働かすものなり。

問 今茲に甲者ありて、其の身軀は極めて強健にして、容貌も亦美なりと雖も、若し其の精神に於て欠隕せる事を確證し得る場合に當りては之れを健全なる人と名づく可きや。

答 否、是れ已でに人にして人に非ざると一般なれば、其處に人あらず(即ち人の價あらず)と云ふも差支無かるべし。
問 又茲に乙者ありて、其の精神は聰明なりと雖も、若し其の他人に對

して、懇切なる心情を欠ける時は、之れを以て直ちに健全なる人なりと云ふを得べきや。

答 是れ又等しく不健全なる人なれば、之れを病的人間と見做すも亦差支無かるべし。
問 丙者ありて、全然良心即ち徳義の觀念を失墜する場合に在ては如何。

答 是れ又人たるの價値を失ふものとして、差支無かるべし。
問 然らば人間就中圓滿なる人たらんと欲せば、如何なる條件を要するや。

答 善良なる智力温厚なる心情良心慈愛及び威嚴等の内界の元氣と、之れに伴ふて發する活潑なる行爲は、即ち圓滿なる人間の必要條件なり。

問 然らば、若し此れ等の條件其の一を失はば、眞の人たるの價値なきものなりや。

答 如此き人は或る程度に於て不具者と見て差支無かるべし。

問 譬へは、茲に甲者ありて其の一臂を失へりと雖も、猶ほ上記の諸件を具備し、又乙者ありて其四肢五臓は盡く具備せりと雖も、上件の内慈愛或は威嚴の一を失へり、然る時は甲乙其の何れを以て、圓滿或は圓滿に近き人と云ふを得べきや。

答 寧ろ甲者の乙者に勝りて圓滿の域に接近するものなり。

問 然らば、男女を論ぜず、右の諸條件を具備して、圓滿なりと云ひ得べき歴史上著明の人物を例せよ。

答 東洋の釋迦、孔子、耶穌、西洋の索克拉底等の如きは其の著明なる者なり。

問 眞誠なる人、圓滿なる人たるの條件なる、彼の精神良心等の如きは見るを得可きものなりや。

答 吾人は精神、良心等の實相を見るを得べからずと雖も、亦其の人の言行に依りて外面に發表する處の作用を見得る事、恰も電氣其の物の本質を見る能はざるも、之れを種々なる工業上に應用して其の作用を見ると同然なり。

問 然らば、人の人たる本質は、目以て見る可からざるものなりや。

答 然り、吾人は之れを目撃する能はずと雖も、人間の思念し、感想し、正義を好み、愛情を抱持する處の可能者を以て、吾人は時により眞の人、或は「内界の人」或は「靈魂」或は「個人」と云ふ。

問 所謂靈魂又は個人と稱ふる者の上に、至當なる名稱或は定義を下し得べきものなりや。

答

否な、大凡世の中に在て、最も單純なる事實は之れに解釋定義を下すに當りて、最も困難なるものにして、是れ恰も普通に使用する物質なる文字と同様に於て、之れに適中せる定義を下すや最も難し。靈魂或は個人と稱するものは、不可見的のものたれば是れ果して虚無なりや。

問

答

否らず、或る學者は其の不可見なるを以て之れを虚無なりとすと雖も、斯る學者は人心の状態を細密に分解し、之れに接近し過ぎたるを以て、反て之れ認る事能はざるは、恰も富士山を遠方より見れば、實に五大洲中の秀峰なりと誇るに足る名山の存在を認むるを得可しと雖も、此の富士山に登り、或は之れを組成せる蘆土と火山石とを分解的に研究したる曉には、所謂富士の絶景は何處にあるやを辨識する能はざるに至ると同然にして、吾人が自己の眼瞼に

問

答

生し睫毛を見る能はざるは、蓋し睫毛の虚無なるに非ず、反て自己に接近し過ぐるを以てなり、現に或る可見的動作あらん限りは其の發動者の存在を否定する事能はざるは、恰も或る物躰を見るも、猶ほ光線の存在を否定すると同様にして、此の靈妙なる人心を如何に分析攻究し盡くすも此の種々雜多なる動作の原因、即ち發動者の存在を否定する能はざるなり、惟ふに學者唯だ古來愚民の間に傳來せるが如き、幽靈的靈魂の存在を否認するも、亦人心不可見的力の存在は等しく共に認むるを憚らざるなり。若し人の四肢の一を切斷し、或は其躰軀を倭少ならしむる時は、其の個人も亦切斷せられ減少せられたるものなりや。吾人は經驗上未だ曾て、如此人の個人の減少せる事實を見ざるを以て益々個人は此の四肢五躰以上に在るものたるを確認するを

得べし。

問 個人は果して何處に在るものなりや。

答 人の個人と名つくる者は、其の行爲に於て見はるゝものにして、就中善良なる心情の發作する場合に於て、其高尚なる状態を見るを得べし、蓋し此の如き個人は單に其の人の肉體内にのみ、其の力を及ぼすのみならず、必らず其の人の周圍にも亦其の力を放散するものにして、甲者の感化乙者に及ぶが如きは、即ち是れなり、故に或る高尚活潑なる大箇人は能く其力を自己以外數千人に及ぼして、尙は餘力あるものなり。

問 此の個人は切斷し能はざるものなりや。

答 夫れ人の身體は種々なる部分より組織せられ、隨て之れを數片に分割するを得べしと雖も、此の個人即ち人の靈魂は單に不可見的

妙力なるのみならず、又唯一にして、決して分割す可からざるものなり。

問 此の妙力を表示するに、如何なる言語を以て適當なりとするや。

答 吾人は一般に『我』と云ふ語を以て之れを表章すと雖も、此の『我なる言語は時として亦此の肉體の上に用ゆる事なしとせず、併し通常肉體の上には必らず其の所有の器具譬へば我れの家、我れの衣服と云ふが如く、『我れの肉體』と云ひ、恰も『真我』の所有物の如くに應用するを以て、『真我』と肉體とは混同す可きものに非ざるべし。

問 已に成長せる者と未だ幼少なる小兒との間に於ける良心の差異如何。

答 孩提の稚兒は、大人の如く、個人即ち自己たる感覺未だ發達せざるが故に、丁成者とは階級的差異あるや勿論なり、是れ恰かも舊は未

だ花たらず、花未だ果實たらざると一般なり。

問 普通の動物は果して『眞の個人』『眞我』たる資格を抱有せりと想像し得るや。

答 吾人は或る昔話にありし、賢人の如く、未だ禽獸の言語を解せざれば、之れを知るに由なしと雖も、亦燕雀も吾人と同等なる『眞我』の觀念を抱有せりとの想像は輕卒に下し難かるべし。

問 人は幼兒より丁成に達する間に於て、如何なる不思議なる經驗を経ざる可からざるや。

答 幼兒より丁成に達するに及んで、人々の自己は即ち一個人として唯一なる力の中心なりし事實を智覺し、隨て自己は其の身軀と五官との主人公たる事を了解するに至るは、人間に取て實に未曾有の一大經驗たるや明らかかなり、而して何人も亦必ず此の事實を経

験せしものなり。

問 圓滿なる人間個人の上に、如何なる宗教的名稱を下すべきや。

答 如此人間は宗教界に在て、之れを『神の子』又は佛と稱へらるべし、是れ即ち人界に於ける最大名譽、最大尊稱たるを以てなり、此の名稱は決して其の人の外貌の上に與ふるものに非ずして、只だ其の人の個人の果して如何なるやを表章するものなり。

問 人間と禽獸との區別如何。

答 此の答案は古來二様あり、甲は階級的區別にして、乙は種類の區別なり、然れども究竟せは二者共に階級的區別に過ぎざるべしと雖も、人情として普通動物と類を同ふするを以て、非常なる耻辱とするは是れ恰も甲富者が乙貧者と親戚たりしを耻づると同然にして、識者の取らざる處なり、何となれば、其の親戚中に赤貧者ありと雖

も敢て自己が赤貧者ならざる限り、決して自己の耻辱に非る事、恰も自己の祖先は鎮守府將軍八幡太郎源義家なるも、己れに其の量なくして、雑兵足輕たる限りは、決して之れを名譽として數ふ可きものに非るべし、果して然らば吾人若し動物として他の犬馬と類を同ふせりと雖も、理に於て決して耻づ可きものに非るや明白なり、吾人は其の類に於て差異あり、階級に於て同等なからんよりは、寧ろ階級に於て差異あるを以て満足とし名譽とするものなり。

問 何をか階級の差異と云ふや。

答 前陳の如く、人も亦動物の一種たりと雖も、比較的、肉體の構造、生理的作用及び大なる腦髓を有す、故に普通動物と雖も亦思想し、推理し、夢想し、記憶し、其他種々なる智識的開發の力を表示すと雖も、人間は遙かに大々の此れ等の諸點に於て、普通動物に超逸する者

たるを以て、階級的異數の差異あるものなり。

問

答

種類に於ける差異とは如何なる諸點を云ふや。
人は動物たると同時に、前陳の如く大々の優者の位置資格を有するを以て、自然普通動物とは大に其の趣を異にす、例之犬馬の如きは、各々其の良心と稱するに足る可きものを抱持するが如き形跡了然たりしと雖も、其の自覺性の全く缺隕するが如き觀なきに非ず、隨て『我』の觀念殆んど無きが如くにして、『我は馬なれば犬と別種類なり』どの思想欠乏せるが如し、故に或る學者は曾て其の愛兒の始めて『我』なる語を發せし日を以て、其の子の人間の誕生の日として紀念せしが如きは、必竟人の人たる價值此の觀念の存するに依るものたるや明らかなり、或は普通動物も亦其の飼主も恐れ愛慕し、時として其の過失ある時は主人に向て慚愧の狀態を表明する

か如き場合往々之れありと雖も、之れを以て直ちに普通動物は人間と等しく道徳心を抱有せりと速断するを得ざるべし、或は犬馬は人間の如くに宗教的傾向なく人類が抱持せるか如き敬神の念慮全く缺乏せるを以て見れば、人と禽獸との差異は、又單に階級的のみに依りて解釋し去り難かるべし、換言せば階級的差異の益々大なるか爲め、終に種類に於ける差別を生ずるに至れるなり。

問 其他人間と禽獸との著明なる區別ありや。

答 然り、人類は常に其の生活の程度を高尙ならしめ、從來の状態より層一層善美なる地位を占めんとする企望を有し、進歩的性質を具せり、然れども普通動物に至ては大に此理想の欠限せるを想像するに難からず、其他人類の更らに他動物に秀逸するを得るに當りて、最も好方便を有す、即ち人類の言語と文章なり、故に人は之れ

を應用し、以て彼我の思想を其の同類間に表章し、且つ之れに依りて其の思想言行或は曾て見聞せし事實を記録し、以て後世に傳へ之れに依りて後世の學者能く先人の思想言行を鑑み、益々智識の開發を圖るを得るの便あり。

問 人類の言語たるものは、全く或る人の發明に係るものなりや。

答 人類言語の或る部分は自然に發生し、又或る部分は人類の發明に係るものにして、例之は人の悲鳴、笑聲の如きは自然に心情の状態を表示するものにして、其他如此種類の言語は萬國盡く其の歸趣を一にして隨て通譯の繁を用ゐざるも、四海盡く共通するものなり、然れども人智の發達するに従ひ、單に如此天然の言語のみにては到底人の靈妙なる思想を互に相通するを得ざるを以て、漸次高尙なる言語を發明せり、此の發明は大に人類の進歩的氣風に適合

し益々之れを利用して智識の開発を助け、終に人をして今日の如く、他の動物を凌駕し、萬物の最靈長者たるの光榮を專にせしむるに至れり。

問 原人時代に於ける人間の状態は如何なるものなりや。

答 原人時代に在て、人類は甚だ野蠻にして、恐くは裸躰の儘森林或は土窟中に生息し専ら草木の果實と其の捕獲し得る處の禽獸虫魚の肉を其の儘にて啖ひしに過ぎざりし、而して住むに家なく、煮るに火なく、又使用すべき器具なく、隨て争鬭の器具とては一つも所持する事なくして、禽獸を隔る實に遠からざるなり。

問 人類は斯る境界より、如何にして今日の状態に進歩せしものなりや。

答 恐くは先づ火を用ゆる事を發明し、小屋を建て、雨露を凌ぎ、舟筏

を造りて湖川に漁獵し、又燧石の類を以て刀鎗矢鏃を作り、同胞或は猛獸と鬭ひ、其他些末不完全なる家具を製して日用を補ひ、次に金屬を發見するや、火を用ゐて銅鐵を鑄鍛し、日用百般の器具、其他衣食住に大改革を加へ、爾來非常快速の進歩を以て今日あるに至れり。

問 原人時代を代表すべき人種は、今猶ほ現世界に生存するや。

答 否、今日最も劣等野蠻なる人種と雖も、猶ほ之れを原人時代の人類に比すれば、遙かに高等に進歩せるものなり。

問 何れの國民を以て、文明の先登者なりとするや。

答 歴史の指示する處に依れば、エジプト國、アッシリア國、印度及び支那の西部の國民を以て文明の先登者たりと云ふを得べし、而して中央アメリカ及びメキシコ等の諸國に於ても亦往古文明の域に

達せし遺跡を殘存せり。

問 太古に於ける人間社會の狀態如何。

答 太古に於ける人間社會の狀態は同血族の人種より成立せる部落(蒙古の廿四部落の如きもの)より成り、族長或は酋長によりて各部落を統御せしものなり。

問 何處の人種によりて國家組織は開始せられしや。

答 東洋に在ては印度、支那の如きは太古已でに國家組織を成せしが我が日本の如きは神武東征の後國家組織を成就せり、泰西諸國に在ては西曆紀元前五百年の頃アデニス人はクリオスセテスの治下に於て始めて國家の組織を成立せり。

問 太古の人類は如何なる文字を用ゐて、言語の記號となし、又近代は如何なる文字を用ゆるや。

答 太古印度に在ては梵字を用ゐ、支那にては蝌蚪を用ゐ、エジプト人は象形文字を用ゐたり、(其他はウエプスター氏大字書の太古文字の表を見よ)而して近代西洋にて使用せる『アルファベット』假名は最初フニシヤ人の用ゐし記號にして、支那に在ては其後篆隸草楷真宋となり、我國の平假名片假名は何れも漢字より轉化し來りたるものなり。

問 古代文明の進歩と近世文明の進歩とを比較すれば、近代に至りて非常に快速の進歩を爲せるは如何なる理由ありや。

答 近代文明進歩の速力を加へしは、第一羅針盤の發明により、航海術に進歩を與へ、次に活版印刷術の發明によりて、思想の交換を便利ならしめ、次に西大陸の發見によりて、古來の迷想を一新し、次に蒸汽船、蒸汽車の發明によりて、運輸交通を敏捷ならしめ、次に電氣の

發明によりて之れを種々雑多の事業に應用し、大に人力と時間とを省くを得、其他智識上道德上の進歩は人類の物質的發明と進歩とに伴ふて著しく進歩せしものなるに依れり。

問 然らば今日の人類は已でに進歩の終極に達せしや。

答 否、今や人類は自己と自己以外の天然力とを制服するの端緒を發見せしに過ぎざるなり、故に將來益々發明に發明を重ね進歩の上に進歩するものなり。

問 然らば、人類は墮落せしものに非ざるや。

答 然り、人類は決して墮落せしものに非ず、又墮落すべからざるものなり、如何となれば人類は神の像に模造せられたるものなるを以てなり。

問 人間は果して神に像られたるものなりや。

答 然り、人若し神に似たる者に非れば、胡爲ぞ神を認識し、之れを敬し、之れに奉事するを得べけんや。

問 人の神に似たりとは如何なる意味なりや。

答 人は即ち神の子として、其の不可思議なる靈性に於て、高尚なる道義心に於て、其の正確なる智識に於て、盡く天父なる上帝に類似せり。

問 然らば、人は如何なる生涯を遂ぐ可きものなりや。

答 人は神の如く潔く聖なるべし、又層一層誠實にして高尚なる可きものなり、斯くて後、人は始めて其の天性を全ふせしものにして、是れ人の必らず達す可き、又成就し能ふ可き生涯なり。

意思

問 冀望と意思との區別如何。

答 冀望のみにては他に何の行爲をも含有せざるべし、然れども意思

とは其の冀望する處に應じたる實際の行爲或は活動を含有せり。

問 然らば意思は外界の運動なりや、將又内界の動機なりや。

答 意思とは勿論人の内界的動機にして、人は或る行爲を爲す可く撰

びし時の決定を云ふ。

問 意思は自己の能力の單一なる部分なりとするや。

答 否、意思は寧ろ動機の運動に於ける自己の全軀を云ふ。

問 意思は自己以外の力、即ち他人の強迫に依りて壓制し得可きものなりや。

答 否、意思は他人の束縛を許さざるものにして、只だ自己の内裡よ

り動かし得可きものなり、故に人は此の事實に依りて、各々意思自

由の權を有する者なり。

問 何をか人の意思發動の根元とするや。

答 意思發動の根元は、人間の本質にして、何時何處に在ても人の食慾、

冀望目的、理想、習慣、品性、智識の全軀、其他何事に限らず、人の生命即

ち本質より流れ出づる總へて人自身の現象に外ならざるなり。

問 人は各々自己の行爲に對し責任を有すとは如何なる意味なりや。

答 何となれば、人の意思は他人の敢て強制干渉し得可きものに非ず、

隨て其の人の意思に出でたる行爲は獨立なるものにして、必ず其

の人の責に任ぜざる可からざるなり。

問 斯の如く人は其の行爲の責を負ふ可きものとせば、今茲に或る人

の行爲に關係して起れる、總べての事物も亦其の責に任ず可きものなりや。

答 然り、人は其の行爲に關聯せる總べての出來事に向て自ら其の責に任せざる可からず、何となれば、其れ等の事物は盡く彼れの行爲に附屬せるものなればなり。

問 今假りに其の身軀の健康は勿論、總べて他の事情も亦盡く善良なる状態の人ありとせんに、斯の如き人の意思より發生する行爲は果して如何なるべきや。

答 斯る人の意思の發動、即ち行爲は常に其の内界の善良なる生命より自然に流出するものなるが故に、能く善良にして協和せる行爲なるや勿論なり。

問 此の宇宙に變轉せざる意思ありや。

答 神の聖き意思は必らず不變なるべし。何となれば神は永遠無究に純善なればなり。

問 人は容易に其の意思を變じ得るや。

答 否、人は自己の全軀を變ずるに非ざれば、其の意思のみを變ずる能はざるなり。故に今若し、新鮮なる思想、冀望、新鮮なる事物、生命の新時代に接して、自己全軀の上に變化の現象を來せし場合に非れば、人は其の意思或は行爲を全く變化せしむるのに非るなり。

問 人の意思は他人の爲めに感化を受くるものなりや。

答 人の自己なる者は、新しき理想を起さしむるに足る可き、他人の力に依りて變化せらるるものにして、或は他人の強き意思は其の人の最初有せし薄弱なる意思に劇烈なる動機を加へ、彼れをして甚だ強健なる者となし得る事實あり。

問 人は豫め動作せんとする意思なくして、動作し得るものなりや。

答 人若し或る強烈なる慾情憤怒等に魅せられたるが如き場合に在

ては、往々豫め意思する事くなして直に動作するのみならず、全く

自己の意思に反對の行爲をも爲し得る事あり。

問 如何なる種類の人間は、斯の如く情慾の波濤に其の身を没入し易

きものなりや。

答 不健全なる家庭に養成せられたる小兒の如き、野蠻人の如き、無教

育者の如き、放恣短慮なる者の如き、約言すれば未だ以て下等動物

の性狀を全く脱却せざる者にして、往々其情慾に驅られ、其意思に

反せる行爲をなして耻ぢざるものなり。

問 既に丁年以上なるも未熟にして、殆んど稚兒に等しき者の状態

は通例如何なるものなりや。

答 斯の如き人の意思は、常に情慾と執着とに服従し、輕薄にして、依頼

す可からざるものなれば、世人は決して斯る人間の言行云爲の上

に重きを置かず、又之れに信賴するものなし。

問 善意と悪意とは如何なるものに比すべきや。

答 善意は嚴肅にして高く、山岳の變動せざるが如く、悪意は卑屈にし

て、濁流の變轉究りなきが如し。

問 悪風に感染し、習慣終に第二の天性となり果して者の精神の狀態

は如何

答 斯の如き人々の精神は、既に悪習の奴隸となり畢りたるものな

れば、謹慎なる人々の如く意思の自由なく、彼れ等は好んで意思自

由の權を剝脱せられたる者なり。

問 盜賊の間に生長せし小兒は、全く四圍の境遇に感染せず、常に眞實

を話し或は名譽を重んずるものなりや。

答 斯の如き境遇に生長せし者は、人世の最大不幸者にして、彼れ等は生れながらにして四圍の悪風に束縛せらるゝものなれば、斯の如き者に向て眞實と正直とは殆んど望み難かるべし。

問 惡を爲す者は、何故に最初第一の惡行を爲すに至るものなりや。

答 惡を爲す者は、自己の尊貴なる價を知らずして、常に己れを賤劣なる位置に下して惡事に與し、後終に惡習慣と虚偽の考案との爲めに、其の卑屈なる自己の全躰を束縛せられ、反て悔ひ改めて善に遷るを以て、非常なる難事なりと感ずるに至りたる者なるべし。

問 道德教育は如何にして獎勵し得可きものなりや。

答 道德教育は、人をして高尚ならしむるを得可き善良なる思想、即ち感化力を以て卑屈に沈淪せる人心に注射し、且つ自ら省みて自己

の價値を秤量せしめ、以て改悛移善の方向に誘導するに在り。

問 善者の意思は何物の拘束をも受けざるものなりや。

答 然り、善良なる人の精神は善を積んとする大望の上に、其の心志を安置せり、而して彼れは其の大望の爲め、勉勵せざる可からざるを以て、常に自由ならざる可からず。

問 神の意思は何物にも繋かれざるや。

答 極めて嚴肅なる意味に於て、神は己れの至善至聖の上に、其の意思の自由を安んぜり、故に神は己れの無限なる自由の意思によりて、博く自由に愛し、自由に運動するものなればなり。

問 善意とは如何なるものなりや。

答 善者の善を行はんとする願意を云ふ。

問 最も完全なる人の自由とは如何なるものなりや。

答 是れ恰も神の善意の如し、何となれば善者の善を行ふは、決して束縛を受け、他人の爲めに強て施すものに非ずして、全然自己の喜んで爲さんとするものたるを以て、真に自由にして恰も神の如し。

問 如何なる處に於て眞の自由と快樂なるものありや。

答 眞の自由と快樂とは、人の善意の完全ある發表を云ふものにして完全に善意の發表する處何處に論なく亦自由快樂の郷と云ふべし。

問 如何なる場合に於て、愚者と悪人とは其の自由を失ふものなりや

答 時と處とに論なく彼れ等が悪心を發し、利己心を逞ふする瞬間より既に自由と快樂とを失墜せしものにして、斯る場合に於ては、彼れ等の最高價なる自己を發表する事能はざればなり、加之斯る利己心深き者は眞の個人として有す可き、自己の唯一をも失ひ

し者なれば、又一箇の不具者として視るも可なるものなり。

問 如何なる抵抗力は人の利己心を抑留するものなりや。

答 利己心に眩惑せられたる者は、到底自ら之れを制御する能はざるべしと雖も、彼れの利己心は常に他人の正當なる權利を侵害するものなるを以て、他人の正當なる權利は、必らず彼れの利己心を抑厭すべし。

問 自由の意思發動は如何なるもの比すべきや。

答 是れ恰かも其の軌道を誤らざして、自由安全に運行する遊星の如し。

問 悪しき意思發動の狀態は如何。

答 是れ恰かも其の軌道を脱出せし汽車の如く、其の結果は自己又は他人を損害するに非れば止まざるべし。

問 利己心は神の大聖意思に反抗するの力ありや。

答 利己心は眼前に神の大善意に背逆反抗せるが如しと雖も、神の大聖旨は決して斯る卑劣微小なる抵抗の爲めに些細の阻礙をも蒙るものに非ずして、神は自由に其の大善意思を果すと得る事、恰も戦敗國の捕虜は鐵鎖を以て、四肢を縛せられつゝも、猶ほ遁逃せんと欲して逮捕者に抵抗を試むるが如し、然れども戦勝國の軍隊は其の指揮官の命令に従ひ、捕虜の踴躍するに係はらず、彼れを逮捕して凱歌を奏しつゝ、進軍すべし。蓋し一人の抵抗は以て三軍の進撃に向て如何ともする能はざればなり。

習慣

問 善良なる習慣と、精神との關係は如何なるものなりや。

答 善良なる習慣は、恰も功妙なる畫工が其の指頭に於て、彼れの技術を表出せしむる處の敏捷なる活動力の如く、其の精神界の善良なる理想を實現せるものなり。

問 人の習慣は如何にして形成せらるゝものなりや。

答 日常の言語行爲は、自然に人の精神の習慣を形成するものなり。

問 習慣は如何なる内界の事實より來れるものなりや。

答 習慣は内界の狀態即ち自己の意思を表白するものにして、惟ふに善良なる習慣とは善によりて支配せられたる意思の實現に外ならざるなり。

問 人の生理的方面に於て『習慣の力』を解釋するに、如何なる事實を以てするや。

答 生理學者の説に依れば、吾人の思想或は行爲は善惡邪正を論ぜず、其の都度悉く人の腦髓を組織せる分子を震動し、其の配置を變化せしめ、以て詳細に腦裡に彫刻せらるゝものなるが故に、一事を屢屢反覆するが爲め、不知不識の間に其の善たり惡たるの傾向に其の心身を牽引するものなり。

問 意思の善良なる際に於て惡しき習慣に染み得可きものなりや。

答 決して善良なる意思は、一朝にして惡き習慣に感染す可きものに非ざるべし、彼の忍耐なく容易に憤怒するが如き習弊ある人は、必竟内界即ち意思の不健全を證明するものにして、既でに其の意思は轉じて邪惡に墮落せしものたるべし、之れに反して善良健全なる

意思は人心を統御し始むるや、漸次に邪惡の習慣を脱して善良なる習慣を作爲するものなり。

問 善良なる習慣を有する者は、如何なる果報を得るものなりや。

答 善良なる習慣と有する心靈は、絶へず正善の意思を發動せしめ、以て自他を裨益するのみならず、且つ毎に天父の恩恵を自得するを得べし。

問 如何なるものを以て、心靈の最大習慣となすや。

答 善良なる意思の習慣、即ち愛心より出づる日常の言行を以て、心靈の最大習慣と云ふ。

普遍なる生命

問 善良なる意思の指導に従ふ者は、如何なる信仰を此の宇宙に置くものなりや。

答 此の宇宙を以て神の聖旨の充溢せる世界として常に天を樂み命に安んずる者なり。

問 斯の如き信仰ある者は、其の隣人と如何なる關係を有するや。

答 斯の如き人は實に親切にして冀望高く快活にして輕薄ならざる言行を以て其の隣人に接す、吾輩は斯る人々を以て、其の何宗を奉ずると奉ぜざるとに論なく、之れを善人とし、或は眞の奉教家、敬神家と稱するを得へし。

問 斯の如き人々を以て、猶ほ文盲なりとし、野蠻なりとし、卑屈なりと

し得可きや。

答 否な、如此人々は眞に文明にして開化せる紳士と尊敬せざる可からず、決して錦衣飽食驕奢を以て文明開化とし、或は斯の如きものを得るを目的とせる者を以て紳士と呼ぶを屑しとせざるなり、若し斯る輩にして紳士たりとせば、吾人は甘んじて野蠻人となり、紳士たるの醜名を放棄すべし、

問 善意は宇宙間何處に於ても、天則の一として、變る事なく行はるゝものなりと想像し得可きや。

答 然り、善意は單に地球上に於てのみ、道德界の法則たるに止まらず、遠く天空を週行する遊星上に於ても、若し彼處に智識的動物ありとせば、吾人は茲の處にも亦道德の常則たるべきを疑はざるべし、何となれば地上の數理は單に人間社會のみの法則に非ざるが故

に之れを應用し、以て遠き日月星辰の世界を測量して、謬らざるは、蓋し地上の真理は宇宙間到處に同一の價値を以て確立せるものたるを知るに難からざればなり、吾人は斯の如き善意の充實せる人生を稱して普遍なる生命と云ふ。

問 人の品格として最も望ましきは、如何なるものなりや。

答 善意ある者即ち其の同胞を裨益せんと欲する人の意思は、其の最も望ましき品格なり。

問 普遍なる生命とは如何なるものなりや。

答 普遍なる生命とは仁愛と善意との充滿せる生命を云ふものにして、此の生命は究竟神の無限無究なる生命と一たるを得可きものなり。

問 斯の如き生命を有する者は如何なる權利を此の世界に有するを

知覺し得るや。

答 斯の如き生命を有する者は、宇宙の「自由民」として、神の子として貴重なる天賦の權利を有する者たるを自認するを得べし。

問 天國とは果して如何なる意味ありや。

答 天國とは、其の何處たるを問はず、斯の如き普遍なる愛と善意の生命を有する人々の精神或は心靈の状態を云ふものにして、何處を論せず愛の活動する處是れ即ち天國なり。

問 然らば天國は現在此の世界なりや。

答 然り、天國とは神聖なる宇宙の意味にして、何處に在ても、人若し善意と愛心の活動を逞ふするを得可き時は、即ち天國に生活するの時と知るべし。

問 斯の如き人の最高尙なる生活を何と名づく可きや。

答 吾人は之れを心靈的生活と云ふ、是れ決して人の貧富と地位と境遇によるものに非ずして、只だ人の内界の状態、即ち人の精神の健康なるよりして得らるべき生活なればなり。

問 人は常に完全なる精神の健康を持續し得可きものなりや。

答 人は肉體の健康にも亦各々其の程度を異にするものにして、完全なる健康を得んと欲する者は常に善良なる生活の法則に全く従順ならざる可からず、否らざれば常に此の肉體の健康を完全に保存する能はざるべし。故に完全なる精神の健康を繼續せんとする者は、必らず常に精神界の法則に全く従順ならざる可からざるなり、何となれば完全なる精神の健康は人の正則なる状態なればなり。

心靈の覺醒

問 小兒或は文化の低き人間思想の状態を、通例如何なる言辭を以て表明するや。

答 吾人は之れを以て未熟の思想、或は幼稚の考案と云ふ。

問 未熟の思想は如何なる弊ありや。

答 思想の未熟なる者は、往々傲慢粗漏にして、事物の斷案を急ぎ、誤謬に陥り易く、狹隘にして且つ頑迷偏執なるを免かれざるべし。

問 道德心の幼稚なる者を如何なるものなりとするや。

答 道德心の幼稚なる者を以て、吾人は未だ心靈の覺醒を得ざる者と云ふ。

問 道德心の未だ覺醒せざる者にして、通常免かれ難き弊害は如何なる

るものなりや。
答 道心の僅微にして無情なる者け、通例私慾即ち利己心に流れて厭

く事を知らざるものなり。
問 人智發達の途上に在て最も重要なる時機とは如何なる場合なり

や。
答 人心の新智見を得て、更らに重大なる職分と公益とを發見し、靈智

の覺醒する場合を以て、人間の最大重要時機とすべし。

問 斯の如き新智見を得て、之れが爲め大に自ら獎勵せし經驗なきや。

答 人は文學歴史學美術音樂等により、就中偉人の傳記或は立志編の

如きものによりて、大に慨慷悲憤の感情を誘起し、時としては非常

に心靈を覺醒せしむる事あるものなり。
問 通例如何なる事物によりて、人の新智見を得せしむるものなりや。

答 有益なる書物により、善良活潑なる説教或は演説によりて、屢々吾

人の精神を興奮せしめ、以て新智見を開發するを得可し、否らされ

ば又人間思想の成長に伴ひ、自然に覺醒の本懐に到達するを得る

事あるべし。
問 如此覺醒は如何なる結果を生ずべきや。

答 智識發達の結果として、吾人は従前に比し遙かに多量の真理の光

明を發見し得るものにして、此の光明は精神を覺醒し、此の覺醒せ

る精神は終に此の光明を認識するものなり。
問 人は又如此覺醒の時機を道德上并に心靈上の發達中に於て見る

を得べきものなりや。
答 然り、吾人は屢々之れと同様の時機を道德上并に心靈上の發達中

に於て、或は大節を持するに當り非常の困窮に遭遇したる際の如きは、屢々心靈的生命の感情を覺醒興奮せしむるものなり。

問 心靈的生命とは如何なるものなりや。

答 心靈的生命とは良心の健全なる活動力にして、吾人の内界に住する神の力の生々活潑なる状態を云ふ、夫れ愛は吾人の心靈を覺醒し、此の醒覺せる心靈は潔白なる愛の歡喜と善美を認識するものなり。

問 愛は人の利己心を消滅せしむべき力あるものなりや。

答 愛は人生に光明を賦與するものなり、故に人をして自己の心靈と萬有は、共に神の仁愛の聖旨を圓滿に實現せしめんが爲めに、此の世に活動せるものたるを知得せしむるを以て、此の愛心に反對なる利己心は恰も東雲の残れる夜來の烟霧が旭日の光に恐れて消

散するが如く自ら消散するものなり。

問 心靈醒覺の結果は如何なるものなりや。

答 之れを譬ふれば、恰も植物が温暖なる春の陽氣に其の芽を萌し、書を破て開花するが如く、他日益々夥多の菓實を生産するや期して俟つ可きなり。

問 古來如何なる文字を以て、此の心靈醒覺の上に命名せしものなりや。

答 泰西の神學者は古來之れを以て悔改 (Conversion) と云へり。

問 此の悔改心なる文字は、果して適當に其の主意を貫徹せるものなりや。

答 凡そ不正、不義、不潔なる悪人にして、己れの罪過を悔ひ改めて善に遷る場合に在ては、蓋し悔改心を起すの必要もあるべしと雖も、

彼の幼稚にして未だ善惡何れをも取捨する能はざる者、或は未だ以て悔ゆ可きの行爲なかりし者をして、益々善行に勸誘する場合に於て此の語を適用する能はざるべし、况や未だ曾て自ら悔ゆるの行爲なき他宗の善智識に向て悔改せしむるの要なかるべし、惟ふに此れ等の用語は古への神學者流の自尊排他の執着より來れるものにして、基督教以外に正當なる教法なしと專斷せる人々が、アダム、イブの遺傳罪を云々し、以て此の世界をば惡魔の配下に置きしもの、迷想を其儘用ゐ來りしものたるべし。

問 然らば他に適當なる用語ありや。

答 時としては又更生、即ち新たに産るゝと云ふ語を使用せり、惟ふに新たなる義務と正義の觀念、愛心と神の子たるの感想の新紀元に於て、恰も肉體の誕生が此の生活の紀元たるに比較せる用語にし

て、此の語は寧ろ前者に比して稍や適當なる用語たるべし。

問 然らば人心は一旦更生せば、最早足れるものなりや。

答 否、人は其の道德的、心靈的發達の途次、屢々新智見を開發して、益益廣大なる生活の狀態に進涉すべきものなれば、隨て醒覺即ち更生の度數も亦之れに相伴ふものたるを要す。

問 然らば如何にして、絶へず宏大なる生活の狀態に昇進するを得べきものなりや。

答 宏大なる生活の狀態に昇進するは、敢て難行苦行に依りて得らる可きものに非ず、單に人間社會に在て正當なる義務、而かも最近の任務より着々として遂行するに在り、何となれば人々終生各自の任務に服し、着々として其の責任を全ふせば、自然にして人生は歲月と共に善良なる運命に向て進涉するを得べければなり。

理想

問 理想とは如何なるものなりや。

答 理想とは吾人の總べての事物の上に於ける思想の最上乘なる想像にして、之れを譬ふれば、美術家の意中に在て或る圖書又は刻彫物に就き彼れの最高尙なる考案の如し再言せば、人心は内界の法則により各自の想像的最高尙なる標本を形成す、是れ即ち人の理想なり。

問 道德的理想とは如何なるものなりや。

答 道德的理想とは、人生或は人の品格の上に於て其の最も高尚完全なりと思惟する處の想像を云ふ。

問 人は理想を目撃するを得可きや。

答 理想は人の五官によりて目撃辨識するを得べきものに非ずして

全く人の思想中に潜在するものなり。

問 眼以て見る可からざるの理想は果して確實なるものなりや。

答 吾人は此の宇宙に在て、無限常住にして最も確實なる事物、即ち内外兩界の法則の如きものは、盡く思想界に屬し、耳目の以て之れを感識する能はざるものたるを承認せり、故に理想の如き人間思想界の事物は五官の辨識を受けざるが故に、物質界の事物よりも更に確實にして遙かに永久のものたるを認識するを得べし。

問 斯る理想の人間に存するは眞實なりや。

答 然り、人間の理想は究竟神の思想の撮影にして、人の眞善美の觀念の如き正義忠實の理想の如きは、必ずしも天祐の啓示を俟たざれば、容易に理解し得可き者に非ざるが如し、彼の幾何學の正方圓

に於ける理想の如きは、何人か未だ嘗て斯る完全なる方圓形を目撃したる者あらん、如何なる精巧なる器具と雖も、人間理想中に於けるが如き正方形圓を畫く事能はざるべし、然れども正方形圓の理想依然として永久に存在するものにして、之れが爲めに少しも缺損を蒙る事なきのみならず、之れを畫く事能はず、之れを目撃する事能はざるの故を以て、人間の思想中より正方形圓は滅亡消失し去るものに非ざるなり。

問

何故に人々の理想に差異あるが如く見ゆるものなりや。

答

吾人は各自外界の境遇を異にし、自ら智識上の差異を生じ、神の大聖思を了解するの不足なるに依り、斯る理想の差異あるが如く見ゆるものなり、然れども人の理想中最も大にして最も緊要なる條件は、自然に相一致せるものなり、彼の道徳的、最高なる理想の如き

に在ては、世界の大神、大賢、大家と目せらるゝ人々の實際本質的に同様の意見を懐抱せるが如きは、即ち其の例證にして、是れ即ち完全なる正方形圓形と同じく、何人の理想も亦同一様にして永久に存在し、而して吾人の心靈は此の理想に融合せんと昇進しつゝあるは、目前の事實なり。

問

人は實際の生活に於て此の如き理想に到達し得べきものなりや

答

理想は常に實際よりは一步先きに位するものにして、人若し之れに到達すれば、已でに理想たるものにわらず、故に人は甲の理想に達するに先ち、既に第二の理想を形成するものにして、恰も小兒が自己の影を踏まんとして日向を走るが如し、自ら一步を走れば、影も亦同一の速度を以一步を走るものなり、然れども小兒は之が爲め、毎歩自己の位置を前進せしめつゝあるは、實際の事實なるべし

問 此くの如く自己の理想に絶對的に到達する能はざるが故に悲しむべきものなりや。

答 否な、決して悲しむ可きものに非ざるべし、何となれば、自己又は自己の爲せし事業を不満足に思考するは、實に有益なる不満足にして、人は之れに依りて益々進歩發達の階級に昇騰すべきものたるを以てなり。

問 此の理想に向て前進して息まざる者の生活は如何なるものを吾人に訓示するや。

答 此の如き生活は、即ち人生に於ける神性の存在と健全なる心靈の實在を證明するものにして、吾人は之れを以て普遍なる生命と云ふ。
吾人の理想は自己に向て如何なる反射作用を爲すものなりや。

答 吾人若し此の理想に照し、自己を反省する時は、必らず謙讓の心を生じ、且つ吾人の生命は未だ以て完成の域に達せざるものたるを了解す加之ず、吾人は此の理想に依りて、神の愛見たるを照鑑し、以て歡喜、自慰、自贊の志を興奮し、此の理想に近き生涯を遂げ得可しとの自信の念慮を確固にするを得べし。

人間社會

問 人間社會の快樂は、如何なる状態に於て認め得可きものなりや。

答 眞誠なる人間社會の快樂とは、人々互に相愛するの精神を發揮する時に於て認め得べし。

問 此の相愛の精神を害ふものは如何なる條件なりや。

答 極端なる自己主義、自利心、惡意等の盛に行はるゝ時は、必らず社會の友誼を害し、相愛の情を滅殺するものなり。

問 斯る哀むべき状態より、相愛の情誼を挽回するは、如何なる方法によらざる可からざるや。

答 如何に破壊せられたる交際と雖も、双方に於て、否、少なくとも其の一方に於て、眞誠なる懇切の情を表示する場合に於ては、必らず之れを挽回するに難からざるべし、是れ即ち前陳の善は惡に勝ち得可きの實證にして、惡意の爲めに破れたる友情を善意によりて感化せられたるものなり。

問 人間社會普通の弊とは如何なる條件なりや。

答 人間社會普通の弊害は、極端なる競争、嫉妬、猜疑、怨恨及び自利的競争論にして、其の結果往々争鬭を挑撥し、終に双方の滅亡を醸すもの

たるなり、現に戰勝國にしてすら其の失ふ處反て得る所よりも多きは屢々吾人の目撃する處たり。

問 何をか現今の社會の理想と云ふや。

答 現今人間社會の幸福多望なる理想は、協力主義なり。

問 此の協力主義の善良なる標本は、實際今日に於て見るを得可きや。

答 然り、頗る健全なる一家族の團樂は、即ち善良なる協力主義實行の標本なり。

問 如何なる理由により一家族は如此相親睦するものなりや。

答 一家族は常に其の利害と名譽とを共にし、隨て其の目的相併行して同一の方向に針路を有し、恰も人の四肢五臓の如く、其の一部の幸不幸は全軀の幸不幸と感ずるを以てなり。

問 如何なる方嚮は社會究局始終の方向なりや。

答 人間社會始終の方向は究竟正善に外ならず。

問 社會の競争は時として有益なるが如き現象あるは如何。

答 社會の競争は時として大に社會の惰眠を覺醒し、其の進歩を敏速ならしむるの効あるものにして、彼の學生等が日々學校に在て其の課業に勉勵なるが如きは、即ち公平にして惡意あるものに非ざるが故に、大に各自の進歩を助長す、然れども吾人は自利的に他人を苦むるが如き社會の競争を以て、決して社會の進歩を獎勵するの効ありと認めざるなり、彼の普通生物界の生存競争なるものも、亦必らずしも極端なる惡意の競争を其の同胞間に試むるの謂に非ざるべし、現に或る種類の動物の如きは、既に此の主意に適合し、全く同類の競争を爲さざるのみならず、各々相互に協力和合し、相助け、以て一社會を形成するものあり、彼の蟻蜂の類より鳥獸の

一群を爲し、一部落を形成して、各々生活を營み、相助け相守るものあるが如きは、即ち其の一例にして、惟ふに同類の競争は全く此の生物界生存競争の主意を倒用せしの結果たるべし。

問 今日の人間社會は、全く此の生存競争主義によりて組織せられたるものなりや。

答 否、一見社會の表面を遠方より窺へば、此の社會は恰も劇烈なる競争場裡の觀あるべしと雖も、深く細かに之れを省察すれば、今日の社會は漸次親密なる關係に繋留せられ、益々協和一致の狀態に進涉し、強者の弱者を助け、足れる者は足らざる者を補ひ、大にしては各國民の制度文物盡く協力主義實現の狀態に進化せんとする傾向、歴然として自然に顯はれり。

問 利己主義の人間は、其の隣人と競争し、以て善意なる人々よりも多

く社會を利益する事ありや。

答

否を、決して社會の利益は利己的競争より來れるものに非ず、反て愛心の獎勵によりて來れる社會の利益を以て遠かに大なりとす。譬へば彼の善良なる教導師が愛心を以て社會を利し、愛國家は身命を以て其の國の爲めに殉し、改革家は其の慈心を動かし、以て萬民を利するが如き、大々の社會の公益は決して利己的競争の如き些細の結果と同日の論に非ざるなり。

問

協力主義の法則内に在て、争論を許さざるものなりや。

答

公平無私にして社會の公益を目的とする議論は、利己的争論の如き拙劣なるものに非ざれば、之れが爲めに社會の協和を害ふ事なきは云を俟たざるなり、故に學者は甲乙各々自己の信認する學説を主張し、農家に在て農政農業上の事件に就き、其の公益利便なりと

する處を主張すると雖も、其の其の結果其の目的は、共に社會の公益を興起するに在るものなれば、之が爲めに社會の安寧、平和、協力等を害する勿きは萬々明白なり、故に協力主義の社會には君子の争を容る可き餘地あるものなり。

問

何を以て利己的競争は社會に有害なるものなりや。

答

何となれば、其の結果として甲之れを得れば乙之れを失ふや必せり、されば社會全躰の公益上より論ずれば決して利得なきのみならず、反て甲乙二者の徒らに勞し、徒らに嫉視するの損失あるに過ぎず、况や兩者競争の爲め其の周圍の社會に至大の損失を間接に加ふるに於て、や彼の希土戦争は此の兩國に關係ある通商を衰頽せしめ、又英國の或る造船場に起れる職工の同盟罷工は我が國より彼の地へ注文せし商船或は軍艦の落成期を遅延せしむるが

如く、數千里外の國民一部の競争は、我が四千萬同胞の不利益を成すに至れるは即ち其の一例なり。

問 然らば如何なる方法は眞に世益有る方法なりや。

答 彼の金言に所謂「己れの欲せざる所は之れを人に施す事無く、又己

れの如く他人を愛すべし」とは眞に人世に有益の良法なり、惟ふに

耶穌は此の理想を實現せんと試みし者にして、二千年間、今猶ほ新

鮮活潑なる芳名を世に傳へられたる由縁なるべし。

問 斯る理想は何れの社會に於て實現せられたるや。

答 吾人は眞誠善良なる教會、或は慈善的協會に於て、其の實現せらる

る事あるを見るべし。

問 人は凡べて此の如き教會或は協會に加盟すべきの必要ありや。

答 然り、此の理想を實現せんとする者は、斯る團體を組織し、或は之れ

に加盟し、以て其の主義實行の補助陪介を與ふるは、既に其の理

想の幾分を實現し、將來の黄金世界即ち天國の落成を迅速ならし

むるものたるなり。

問 主禱文中の「爾國を臨らせ給へ」と云へる意味如何。

答 是れ即ち現社會をして、正と善との王國たらしめ、上下和睦し、以て

太平の天下たらしめ玉へとの企望を表白せしものにして、所謂「娑

婆即寂光淨土」たらしめんと云ふに同じ。

問 現今の社會に、此の冀望を實現し得可きものなりや。

答 然り、吾人若し愛の真情を表章して、此の社會に立つ時は、既に社

會の一部は此の域に到達せるものなり、故に現社會の完全を企望

する者は、須らく先づ自ら完全なるに在り、何となれば他人盡く完全

なるも、己れ一人の未だ完全ならざるが爲めに完全なる社會と云

ふ能はざるを以てなり況や自ら完全なるを欲せずして、社會の完全を望むは刀を其の身に加へて傷つかざるを冀ふと一般にして如此人は自己を忘れ、社會の上即ち他人の行爲にのみ其の眼を奪はれ反て自己は社會の一員たるを忘却するものなり。

問 現社會を斯る競争より救済するの良法如何。

答 人々自ら其の利己的割據自利的競争の心を去て健全眞實なる家族的人間社會を組織するに至り始めて社會普及の救道を成就するものなり。

○宗教

宗教に就て

問 宗教は何時頃より此の世に起原せしものなりや。

答 或る意味に於て、宗教は人間あるや否や直ちに人心の根底に起原せしものにして、宗教は人間と殆んど其の起原を同ふすと謂ふを得べし、然れども既に宗教的形式を構成せしは、比較的に遼遠ならざるが如し、印度エジプト漢土等の古國の盛時、已でに或る程度迄で發達せし跡を今日に於ても尋ねるを得べし、惟ふに人類が此の宇宙間何れの處に於ても顯現せる靈妙不可思議なる勢力を觀じ、己れは全く之れに依頼せざるべからざるを感ずる哉、否哉、直ち

に之れに向て或る強烈なる感情即ち奇怪の念、驚愕、恐懼の念、其他願望の念を喚起せしものなるべし。惟ふに是れ等の思想或は感情よりして、彼の太古草昧の宗教的現象を起原せしものなりと信ぜらる。

問 人生の最大至要の難問とは如何なるものなりや。

答 (一)吾人は何故に此の世界に生息するか(二)其の運命は果して如何に成り行くものなるか(三)此の世界は如何なるものなるか(四)如何なる勢力の作用によりて如此存立するか(五)其の勢力とは如何なる種類のものなるか(六)若しくは其の勢力は人類を愛撫し、之れが爲めにする處あるか(七)果して人類の爲めにするものなれば人類は此の勢力(或は生命)と相併行して悖らざるが爲めに、如何なる責任を負ふものなるかとの問題は是れなり。

問 宗教とは如何なるものを總稱するや。

答 宗教とは上述の最大至要の難問の答案にして、就中之れが積極的、答案なり、故に宗教とは此の宇宙間に磅礫として瀾瀾せる不可思議力の實在と、其の品格性質とに向て、人類の思考する處感得する處、且つ之れに適應す可き人類の行爲を云ふ。換言せば、宗教とは正統なる神人間の關係を保たんが爲め、人類の勤勉なる云爲にして、人は自己の周圍に顯現する不可思議力の内裡に生存するものなる事實を感得するや(第一)自己と是れ等の不可思議力と密接なる關係を有せりとの事實を理想し、或は之れを推理す(第二)人は其の理想に相應せる感情と意思の發動を促がすものにして、一例を擧ぐれば、恐怖心、尊敬心、愛慕心の如し(第三)其の感情と意思の發動は必らず外界の事物の上に現象し來り、終に其の情緒をして祭壇、寺

院、供物、經典、祈禱、贊歌等の事物に轉化せしむ、故に此れ等の事物、品性、等級は、必らず人の宗教的思想と感情の性質如何によりて差異あるものにして、惟ふに人は勉めて神の欲する處を行ひ、之れによりて神の眷顧を蒙り、隨て正當なる關係を神人の間に保有せん事を期するものたるなり。

問 世間に種々異様なる宗教の流布せる由縁は如何なるや。

答 種々多なる宗教の世間に流布する由縁は、即ち時代と人智の程度各々相異なるが爲め、人々の間に此の不可思議力に對する思想と感情との差異を生じ、隨て其の言行云爲に顯はるゝ處の、宗教的形狀に異變差別を生ぜしものたるなり。

問 宗教は太古より一定不變ならざる可からざるものなりや。

答 宗教は或る點に於ては唯一のものたりと云ふを得可し、然れども

人類智識の程度により、彼の靈妙なる神に關する觀念も亦大に異なるものにして、世に文明と野蠻との差別あるか如く、宗教にも亦合理的宗教と妄誕不經なる宗教との區別あり、惟ふに大人の思考は小兒の思考より數等進歩せるものたらば、人智の未だ幼稚にして野蠻蒙昧の時代に行われし宗教に比すれば、今日の宗教は遙かに進歩したるものたらざる可からず、されば宗教の狀態は人智の開發靜止せさりしが如く、太古より一定不變のものに非ざる可し。所信の宗教の種類階級に依りて、信徒の上に如何なる影響を及ぼすものなりや。

答 之れに依りて、信徒の品格上に大なる差異を生ず、如何となれば、總へて人間の行爲は、必ず先づ其の推理如何と相併行するものなれば、人若し虚偽の思想と劣等の感情を有する時は、胡爲ぞ之れに依

問 若し人の行為にして、正當ならざる時は、如何なる結果を生ずるものなるや。

答 人の行為正當ならざる時は、必らず其の人の世に出でて、正當に領受すべき幸福を失墜すべし、是れ恰も航海者が虚偽の海圖、或は虚偽の航海學、破損せし磁石によりて、大洋を航海するに等しくし、決して其の目的とせる港灣に向つて安然に航行する事能はざるべし、總べて人間の世渡りにても、亦斯くの如くなるなり。

問 最も劣等なる宗教とは、果して如何なるものなる乎。

答 今日の世界に在て、最も劣等なる宗教とは、所謂フエツチシズム(奇怪物禮拜教と云ふ)とす、此の宗教は彼の靈妙不可思議なる勢力の現

象をば、一種奇怪の物品とし、或は卑屈なる根性を以て之れを畏懼するにあり、譬へば青雲を凌駕して屈曲せる大木、或は凹凸不整なる巖石、其他之れに類似せる物躰は、盡く之れを神とし、禮拜し、或は奇異なる形状彩色の砂礫、或は奇なる形状の木片、或は守札等を取り、之れを尊崇寵愛し、以て己れの守護神と所念し、之れに由て危難、災厄、疫病、其他天然の迫害より逃れん事を冀望するものなり、故に此のフエツチシズムに在ては、眞誠なる神の觀念を缺乏するもの如しと雖も、猶ほ宗教の範圍内に置きしは、他ならず、即ちフエツチシズムと雖も、猶ほ人類の周圍に充實圓滿なる彼の靈妙不可思議の力に就ての觀念の萌芽を有すればなり、抑も此のフエツチシズムなるものは、最も愚かなる未開人種の宗教なりと雖も、已に高等なる文明開化の國に於ても、猶ほ愚夫愚婦の間に在て其の勢力を逞ふ

するを見聞するものなり、加之に古器物骨董或は寶物(大人の翫弄物)等を鍾愛尊重するか如きは、多少此のフエツチシズムの範圍内にあるものなり。

問 大古草昧時代に於ける宗教は今日のフエツチシズムの如きものなりし乎。

答 太古草昧の間に於て行はれたる處の宗教は果して如何なるものか、今日吾人の得て知る處ならずと雖も、人種の其始め宗教的生活を創むるに當てや、必ず彼のフエツチシズムに超過せざりしものと信ぜらる、而して太古朦昧の人類は彼のフエツチシズムの思想より、此の不可思議力に向て最も畏懼の念を抱き、之に由て來る處の災厄危難を防禦せん事を勉めたり、勿論此等は今日の想像上の議論なれども、此のフエツチシズムは最も古き時代に於ける人間の行爲の

一として、猶ほ今日に至る迄で最下等人種の生活中に残留せしものたる事は、大に信するに足るの議論なり。

問 其他太古人類の宗教として、今日吾人に知られたるものある乎。
答 歴史を關するに、古代の人類は或る種類の動物を禮拜し、或は日月、

星辰、名山、大川、迅雷、風雲、水火、狐狸の類を崇拜せり、要するに此等の動物又は天然物躰は同じく生命、就中其内に一の超理的精靈の潜伏せるが如く信じたるものなり、其他祖先禮拜も、屢々古代宗教の一として今尙ほ世上に流布せるものあり、必竟此の信仰は子孫未裔の想像に由て遙遠なる彼等が祖先の靈魂は在世の時よりも、遙かに威力ある神靈と仙化せしものと信するに在り。

問 右に掲げし諸宗教は以て吾人の宗教となすに足る乎。

答 否を決して然らず、然りと雖も總じて此等劣等卑下の宗教も、猶ほ吾人の周囲を環繞する彼の靈妙にして不可思議なる勢力に對する、人間の智識に外ならざるなり、乍併吾人は此等の卑屈なる古代宗教を以て、今日智者學者否々、今日一般人間の以て信據するに足るものたりと云ふ事能はざるなり、如何となれば、今日の智者學者は勿論、今日の人間社會は一般に其智識の發達と共に、宗教の發達も業に已に高尙なる地位に發すればなり、之れに反して太古の人類は朦昧にして、宇内に最大高尙なる天則及び秩序の存するを知らず、又森羅萬象の内に唯一の眞理あるを知らざるが故なり。

問 古代の宗教中には高尙なる宗教の痕跡だにも無きものなる乎。

答 勿論今日の如く宇宙を統御する唯一至尊の力、即ち神の天地間に顯現せし事實を認識するの明無きも、人類發達の歴史時代に遯ん

では、其中に高等なる宗教の痕跡を見認むる事を得べし、故に吾人は人間の思想及び生活の程度の進歩すると共に、宗教も亦劣等卑下の地位より高尙優美の地位に進歩しつゝあるものたる事を信するものなり。

問 何をか劣等なる宗教の特有徴標とする乎。

答 心理學上の語にて吾人は之れを迷信妄信或は心酔と云ふ夫れ迷信せる人心は、天然の道理と天然に違背せる非理とを區別する能はずして、常に之れを混交せり、又迷信は常に無智の好伴侶にして一旦智識の光輝に遭へば恰も朝露の如く去て跡を止めざるに至るべし。

問 何をか高等なる宗教の特有徴標となす乎。

答 道理即ち學理の討究に由て得たる處の智識を云ふ、合理的の人間

は常に物躰の外観即ち表面上の觀察、或は感情或は想像力に由て其本心を支配せられざる様謹慎注意するものなり、合理的思想の發達と學術哲學の進歩は高尙なる宗教と常に相併行するものにして、先進晴黒の宗教は後進の光輝燦爛たる智識に由て耕され、益益高尙なるに至るものなれば、若し人智の退歩し、自由討究の道塞がるの時代に於ては、必らず宗教の之れと共に退歩し、卑劣となるに至るものなり、故に歴史上、所謂晴黒時代に在ては、常に劣等宗教の蘇生するを見るに至るも亦宜なるかな。

問 宗教と違背せる學術、哲學の論説は果して眞理なる事を保證し與ふ乎。

眞理を開發するに必要具なる學術或は哲學は、屢々或る種類の宗教に反對せる事實ありと雖も、要するに此等の學術或は哲學と雖

も共に此の宇内に圓滿充實せる靈妙不可思議力の實在を信認せざるべからざるに至ては、無論宗教の眞面目に反對の地位に立つものに非ざるものなり。

近世の學術又は哲學社會の代表者として、有名なる、ハーヴァード、スペンサー氏の著書を開するに、總べての不可思議なる物の内に在て之れを推究すれば、益々不可思議より不可思議に入るものあり然れども、其終極に至て一の絶對なる事實を殘存する者にして、是れ即ち人類が常に彼の萬有の依て來る處の永遠にして無窮なる一勢力の面前に在て生活せりと云ふ事實なりと、此確固なる事實の存在せん限り、哲學科學は如何に考ふるも、高尙なる宗教の敵手と稱ふるを得ざるものなり。

問 若し將來人類は完全の發達を遂げたる時に於て猶ほ宗教を要す

る乎。

答 日耳曼の理論家にして、且つ詩作の妙を以て後世に其名を轟かせるグーテ氏は、曾て其著作中に云へる事あり、世界の歴史中に在て一つの確固不拔の基礎と云ふべき問題は、常に信仰と不信仰との間に發する軋轢なりと、此の語に由て之を考ふるも、宗教は古へより人類の氣象として、又は社會の元氣として、發生せしものなれば、社會に人類の氣象と元氣の存在する限り決して宗教は廢滅に歸せざるものなり加之に人類の生活に於て宗教に代ふる處の物あるを見聞せず、故に人間は此の靈妙不可思議の勢力を覺知し、又此の勢力の外に立つ事能はざるを認識し、此の力に依頼し、此の力に和合せざるべからざるを承認せる限りは、茲に或る種類の宗教は必然存在せざるべからざるものなり、而して神、人、義務の三字句は最も

緊要なるものにして、人の恣に之れを別視する能はざるものなり。

問 然らば如何なる形狀の宗教は適當にして、且つ必要なりとする乎。

答 抑も此の小冊子は此の問題に應せんが爲めに著述せしものなれども、茲に豫め注意を引かんと欲するものは、即ち吾人の主なる目的にして、此目的は即ち適用せられ得べき凡べての學術、或は哲學上の眞理をして、徒らに空論に止めしめず、之れを人類の實用に轉化せしめんとするに外ならざるなり、譬へば近代に至り學術及び哲學に由て發見せられし思想界の高尙純粹なる事實、或は物質界の美妙なる事實等の如き、吾人は之れを全智全能なる神の榮光の現象となし、或は思想界物質界に在て整然として亂れざる大法則ありて、常に吾人の上に大なる關係を及ぼすを見れば、吾人は之れを以て人類の義務の負ふ處あつて遁逃すべからざるを觀ず、神に

向ての思想を合理的に研究する事に由り、益々神の完全無缺なるを沈思熟考し、而して義務の天則に順従なるに由り、益々吾人の品性を高尚の域に發達せしむ。此品性を高尚優美ならしむるは、即ち吾人の地上に於ける生活の最大目的たればなり。

問 無神論とは如何なるものなりや。

答 無神論とは全然宗教上の事物を其の根底より否定するものにして、無神論者は如此云ふべし。世の中に人間以上の力なし且つ人間を愛撫するもの決してあるなしと。

問 無神論は正當に立證し得可きものなりや。

答 否な、決して完全なる立證を爲し、無神論の主意を貫徹する事能はざるべし。然れども古來些少の無神論者として目せられしもの無きにしも非ずと雖も、往々世人は其れ等の人々を誤解し強て、無神

論者の名を負はしめたるに過ぎざりし、彼の大賢ソクラテースの如きは當時無神論者として世人に指目せられたるを見るも、亦以て類推するに難からざるべし。

問 不可思議論者とは如何なる思想を持する人々の上に冠せらるる名稱なりや。

答 吾人人類は、決して宗教的事物の真相、即ち神の存否を知り得可からざるものなりと主張する者を不可思議論者と云ふ。

問 如何なる事實が、人をして不可議論に傾向せしむるものなりや。

答 世間に種々數多なる宗教の存在せる事實に依り、自然此れ等の人は、宗教界の事物は何れを眞とし何れを偽とすべき處の標準なしと斷定せるによるものなり。

問 此の事實に依り、不可思議論者の思考するが如く、吾人は眞に宗教

的 事物を盡く知り得可からざる事を證明するに足るものなりや。

答 否な、決して然らず何となれば世間に在て外界の事物、即ち物質上の議論に於ても、亦種々雑多の異説ありて、固より一定せざるものなりと雖も、學者は之れが眞想を發見せんが爲め、身命と財産とを抛て、刻苦勩せるに非ずや、然る時は種々異説あるの故を以て直ちに其の眞層を穿つ可からずとするは、反て淺近にして且つ大胆なる結論と云はざる可からず、况や物質論者の所謂細微分子或は「オートテル」の如きは、精神界の事物と等しく共に目撃す可からざるものなるに於て、凡そ眞理と名づく可きものは、深遠幽玄なるものにして容易に解釋し得可きものに非れば、不可思議論者は之れを知る可からずとの論法を用ゐんよりは、寧ろ「吾之れを攻究し解釋するを欲せず」と云ふの勝れるに如かじ。

問 世間に於て相應なる學識經驗もあり、社會の上流に立てる人士にして、宗教的事物の上に冷淡無頓着にして、之れを看みざる者あるは如何なる理由なりや。

答 此の如き事實世の中には往々有り得可き事にして、彼の色盲の人は判然たる或る物色の辨識力なく、詩情の鈍き人には詩歌音曲の興味なし、如此宗教に冷淡なる人々は往々最初宗教を誤認し、後ち終に宗教の眞味を嘗むるを欲せざるに至りしものなるべし。

問 人は無宗教者たり得べきものなりや。

答 或る場合に於て人は所謂無宗教者たり排宗教家たり得可しと雖も、猶ほ根本的に人は宗教的動物たる事實の軌道を逸脱する能はざるべし。

問 何故に人は根本的に宗教的動物たるの軌道より脱出する能はざ

るや。

答 如何となれば、人は神の存在を自認するとせざるとに論なく、究竟此の宇宙間の不可思議力と其の現象たる物質界とは瞬時と雖も、無關係なる能はざるを以てなり、加之人類は自覺性動物にして覆載間森羅萬象と彼自らとの分離すべからざる關係を認識し、且つ宇宙間に顯現せる靈妙不可思議力に、全く依頼せざるべからざるを知れり、彼は天性として此の勢力と一致和合せん事を冀望す、故に人類は此の天性あるにより宗教的生活者たるを得るものなり。

問 人類は何處の地に住居するものと雖も盡く宗教性を具有する乎。

答 何れの人類、何れの國民、何れの種族を論せず、或る形狀に於て宗教は天然性なり、又必要なるものなり、故に世上未だ曾て宗教の全く

欠乏せし人種あるを見ざるなり、譬へば人類生活の記録として今日迄で殘存せる彼の歴史は、人智發達の度に從て固より優劣ありと雖も、常に宗教的性質を含有せし事實を明示せり。

問 人間にして根本的に宗教を有するものならば、宗教家の運動は左

まで社會に於て其の必要を見ざるが如し、然るに宗教家は如何なる理由によりて、其の運動を繼續せざる可からざるものなりや。

答 宗教家の運動は勿論至大の必要あり、何となれば此の宇宙間に顯現せる大勢力(神)に關する智識と、又吾人と其の勢力との正當なる關係を得る事は、吾人々類の生命健康繁榮幸福等の依て立つ處の基礎たるを以て、益々深く之れを攻究し以て其の蘊奥に徹底せん事を期するが故なればなり。

問 世界の宗教を大別すれば幾種となりや。

答 世界の各宗教を大別して二種となす、甲を多神教と云ひ、乙を一神教と云ふ。

問 多神教と一神教との區別如何。

答 多神教とは種々異様なる諸神に奉仕するものにして、彼の八百萬神の存在を信認して、個々別々の神々なりとして、奉事する神道の如きは、即ち其の一例なり。一神教とは其の奉事する神又は佛を以て、唯一無二として、之れに事ふるものにして、猶太教の如きは其の一例にして、又或る點に於て、阿彌陀如來の一佛のみを是認する眞宗の如きは、稍一神教に髣髴たり。

問 多神教を奉ずるの理由如何。

答 太古の人種は、日月星辰等の如き、其他百般自然的物體の上に顯はるゝ、天然力を以て、各々別種の勢力即ち別種の神に依りて成れる

ものなりとして、之れを神と尊崇し、或は死せる英雄豪傑の靈魂を封じて、神となし、甚だしきに至ては、現在に生存せる古代の國王等を神とし、之れに奉事し、以て多神教の成立を見るに至れり。必竟するに太古の人種は今日の如く、科學の何物たるを知らざるの時代に於て、宇宙萬象の上に現はるゝ種々なる勢力は、必然一大勢力の異様なる現象垂跡なりし由縁を知らざりしに依れり。

問 吾人は如何なる理由によりて、一神教を奉ずるものなりや。

答 吾人は此の宇宙間の萬象を以て唯一に歸着するものなりと認し、換言せば、此の宇宙は恰も縫目なき衣の如く、其の一細縫緯と雖も、能く其の全軀に通達せるものにして、隨て其の裡に行はるゝ、天則も亦唯一ならざる可からず、必竟吾人は如此無數の現象を以て、盡く天地間に磅礴として際涯なき唯一神の意思の發動に外なら

ずとするものなり、近く譬を取て之れを證せん、人は所謂小天地なり、此の小宇宙間に普通なる勢力の中樞即ち我の言行云爲實に千差萬様なりと雖も、吾人は決して自己の真我は復數にして三四あるものなりと觀念する能はざるべし、何となれば我が言行如何に千態萬狀なるも亦盡く甲乙相互に關聯して、此の裡に完備せる統一の確かに行わるゝを見るや、暗中火光を見るよりも明瞭なり、蓋し人の言行云爲とは何ぞ、是れ即ち真我の思想の外界に向て發射する發動現象に非ずして何ぞや、故に曰く、吾人の所謂神は此の廣大無邊なる宇宙間勢力の中心、即ち宇宙の真我にして天地の萬象は盡く神の思想の發動現象なり而して此の一大真我也亦徹頭徹尾唯一無二にして、其間に復數の概念を許すの餘地あらざるものなり。

問 答

坊間に所謂正統派キリスト教なるものは、果して一神教なりや。正統派キリスト教は、三位一體の神教を奉ずるを以て、或る程度に於て一神教たるを得可しと雖も、深く其の真相を推究すれば、決して眞誠なる唯一神教と云ふを得ざるべし、如何となれば三一神教に在て聖父の神、聖子の神なる三神は、各々單獨に於ても亦完全なる一個人的の神なりと信認し、此の宇宙は恰も三神の合議政を行へる國家の如くに見做すを以てなり、之れに反して唯一神教は一步を譲りて假に聖靈若しくは聖子の兩神ありとするも、此れ等は決して個々別々の神なるを認定せず、必らず他の唯一神の或る一二の現象に過ぎずと論定するを以て、聖靈聖子の如きは、他の動植金石と共に盡く圓滿完全なる唯一神の一片の現象に過ぎず、隨て此れ等は盡く唯一神に隸屬せるものなりとす。

問 完全なる宗教とは果して如何なるものなりや。

答 完全なる宗教とは、其の教旨に於て全然眞實無妄にして、且つ其教旨と相伴へる行爲あるものを云ふ。

問 何れの時に於て斯る完全なる宗教は、此の世界に實行し得らるゝものなりや。

答 人間社會は漸々進化の大法に則り上達し、人智は益々聰明となり善良なる徳風の普及せる時代は、即ち眞誠なる宗教の普及せる實證なり、然れども今日の如き未完成の社會に於て斯く完備せる宗教の實行を見る甚だ難かるべしと雖も、任他一個人にても此の精神を確守して社會の逆流を反正せしめんとする者あらば、已でに社會の一分子の間に眞誠にして完全なる宗教の實行を見るを得べし。

問 宗教の最大至要の原素とは如何なるものなりや。

答 神と人との上に於ける正當なる思想と、正當なる感情と正當なる意思なり、惟ふに此の原素は人をして正當なる言行云爲を發表せしめ、以て神人の間に正當なる關係を保持するを得可けれなり、約言せば宗教の原素とは神を敬し人を愛するの謂なり。

問 宗教的儀式、禮典、或は宗教的結社は、此の社會に實際必要なるものなりや。

答 然り、然りと雖も此れ等は宗教的要素より產生せる自然の結果にして、決して宗教の實相本體たる可きものに非ざるなり、故に吾人は將來宗教的儀式、禮典、教會及び結社は、宗教の大目的を達せんとする處の一の方法たる事實を正當に了解せられ、且つ正當なる之れが應用を見ん事を企望するものなり。

問 宗教的儀式、或は結社等は古來之れを濫用せられたる事實ありや

答 然り、不幸にして人間歴史上一の汚點として、宗教的儀式禮典教會結社等を誤認し、又濫用せし事實あり。斯くの如きものは必竟宗教的人生の培養補助の具たるに過ぎざるものなるに反て古來之れを濫用し、或は之れを以て宗教の本體實相の如く誤認し、終に人倫の大法を度外視し、只管或る教會に參詣し、祈禱し、經典を素讀するを以て能事終れりとし、敢て宗教的精神の光明たる日常人の徳行を顧みざるに至れり。現に今日の社會に於ても猶ほ斯くの如き教會結社或は宗教家なしと斷言す可からざるのみならず、吾人は反て斯る宗派の世間通俗間に持て嚙さるゝを哀まざるばあらざるなり。果して然らば、今日の社會に在て宗教的儀式禮典教會結社は人生の培養を期すべきものに非ずして、反て人生と宗教とを賊するものと謂つ可きなり。

問 如何なる儀式又如何なる結社を以て、善良にして能く其目的に適合するものと云ふを得可きや。

答 眞に宗教的生活を正當に表白し、隨て其の進歩を助長すべきものを云ふ。

問 今日の社會に至適せる宗教の眞面目とは、如何なるものなりや。

答 神人の藹然たる和合にして、人類の平和は即ち宗教の眞面目なり。此の主意ありて後儀式たり結社たり教會たるもの自ら平和を嘆美讚和するの場處として成立し、終に此の大世界をは惡事てふ事物より救済し得るを以て、宗教の眞面目と云ふ。

問 宗教は人間社會にて如何なる職分を有するものなりや。

答 彼の音樂、美術、文學は、或る人生自然の嗜好を満足せしむるが如く、

宗教も亦人生固有の深遠幽玄なる理想を満足せしむるの具たるなり。

問 人は此の世の中に在て、安心を得んが爲め、如何なる事物の保證を豫め企望するものなりや。

答 吾人は人生の終りを全ふし、善良なる結果を得せしむる事、或は此の宇宙間の不可思議力、即ち大生命(神)は吾人々類に向て同情と仁慈とを垂れ給ふ事、或は世の中に恐る可き悪事の盡き果て、今日人の悪事を呼び做すものと雖も、他日善美に轉化すべき事の保證を企望するものなり。

問 人は如何なる状態に於て、其の生命の連綿たらん事を企望するものなりや。

答 人は靜肅にして、信實と企望と、快活なる智能的生活を繼續せん事を企望するものなり。

を企望するものなり。

問 高尚なる宗教は實際如何なる賜を人生に與ふるものなりや

答 宗教は眞誠にして幸福なる人生の秘蘊を與へ、得意の位置に在て驕らず、失意の地位に在て恨みず、明暗其の志を變ずる事なく、困難に接して健然なる企望を持し、快活にして緘々餘裕あるの精神を興奮せしむるものなり。

問 人若し宗教的人間たらば、如何なる利益を其の生涯に獲收せらるるものなりや。

答 政治社會に在て、又其の家郷に在て、何時何處に於ても、其の人は常に人類の幸福を増進するが爲めに、己れの全力を盡し、救世者、改革者、發明者、徳義家として、人生最大の名譽は期せざるも亦獲收するを得べし。

聖書

問 宗教的書籍の中現今世界に於て最も著名なるは何々なりや。

答 聖書、印度の佛典三藏、支那の六經、回教の香蘭、火教の「ゼンダヴェスタ」等なり。

問 聖書は他の書籍の如く、或る一定の目的と表題の下に著述せられたるものなりや。

答 否、聖書は多く猶太人即ち希來人種の手によりて成れる種々異様の書物を集合せしものにして、隨て著述の年代も亦數百年間に亘り且つ同一様の目的同一様の表題の下に記録せられたるものに非ず。

問 然らば、聖書は如何なる材料を其の内に包蔵するものなりや。

答 聖書は希來人の歴史、法律、古來の傳説、古代の風俗、英雄の傳記、詩歌、及び説教等にして彼の人種の最良と認る處の政治上道徳上并に宗教上の思想、儀式等を記録せる書冊の全集と見て可なるものなり。

問 聖書は何故に如此著名なるものなりや。

答 歐米各國に於て、宗教、道徳、學校、病院、國家の制度、文物、并に社會の制裁及び理想は、大抵此の聖書中の理想を實現し敷演せしものなればなり。

問 然らば、聖書は其の巻首より巻尾に至る迄で、盡く現社會に於て必要欠く可からざるものなりや。

答 否、聖書は其の各部に依て大に其の價值を異にするものにして或る部分の如きは殆んど不要に屬するもの少なからず。

問 何を以て、聖書中如此價値の甚だしき差異を生ぜしものなりや。

答 希來人種は他の人種と等しく、太古は皆な野蠻蒙昧にして、其の思想も亦賤劣たるを免かれざるを以て、其の宗教的觀念を表白するに當りても、亦往々粗野にして、且つ兒戯に類するもの少なからざるを以てなり。

問 聖書中如何なる部分を以て善良なりとするや。

答 聖書中或る詩人の思想、即ち詩篇の或る部分の如き、一二豫言者の教訓の如き、就中イエス及パウロの教訓の如きは、其の最も價値あるものなり、蓋しイエスの教訓の如きは、論語の孔子に於ける、佛典の釋迦に於ける『メモラピリア』のソクラテースに於けると一般にして各々自己の著作を後昆に傳へたるものに非ず、只だ彼の教訓として門人等が四福音書中に記録せられたるものを云ふのみ。

問 聖書は如何なる方法によりて著作せられたるものなりや。

答 或る論者の如きは、之れを以て超自然的聖典とし、全く他の書物と著作の旨趣を異にするものなりとし、神は直接に著者の心と手を支配し、以て其の一句一章たりとも神勅の尊嚴なる主意を記録せしめたるものなりとす、或論者の如きは、又聖書中字々句々は盡く神の特例なる方法、即ち奇跡によらずとするも、亦其の大體の上にて神の默示を記録せしものなりとせり、然りと雖も之れに向て如此見解を附する場合に於ては、自然茲に一つの難問に遭遇せざる可からず、聖書の著作を以て特例なる神の默示に出でたりとせば、聖書の開卷第一に於て、吾人は決して聖なる神の思想たるの痕跡だに認むべからざるのみならず、反て希來人の質樸粗野なる人間的思想を記録せし、徴證あるを以てなり、一例を擧ぐれば、聖書中の神は動物は愚か、甚だしきに至ては、人命の燔祭を捧げらるゝを喜ばれ、或

は神は嫉妬の神として、希來人の敵を滅ぼし盡くすを以て悞樂とするが如し、果して然らば聖書を以て全然神聖なる天意の寫眞として見る能はざるや明らかなり。

問 聖書中に散見する宗教的眞理は、他に之れと同等なる眞理を發見す可からざるや。

答 世界の諸宗教を公平に研究する時は、聖書以外種々なる聖典に於て、神の最大思想を發見する豈敢て難事たらんや。

問 聖書の他に神聖なる經典は世に存在するものなりや。

答 然り、印度入ベルシヤ人支那人及び佛教徒は何れも之れと同等なる聖典を有するものなり。

問 如何なる書物の特性は、之れを聖典たらしむるものなりや。

答 或る一定の意味に於て之れを云へば、人類の宗教的思想、感情、意思

をして益々高尚ならしむるが爲め最も有益なるものは、即ち神聖なる經典なり、然れども廣き意味に於て之れを云へば、單に宗教上の記録のみ聖典と云ふ可きものに非ずして、普く人生を裨益すべきものは、吾人之れを聖書と云ふを得べし。

問 近世の書物にして眞に聖典と稱すべき價值あるものありや。

答 然り、其數夥多あるべしと雖も、一例を以て之れを云へば、チャニングの文集の如き、ダーウソンの進化論の如き、其他近世の大發明家、或は進歩的宗教家の著書の如きは、確かに聖典の一たる價值あるものなり。

問 聖書歴史の他に神聖なる歴史ありや。

答 然り、近くは我が日本帝國の皇統一系にして、千古に連綿たる歴史の如き、或は米國文明史の如きは、確かに神聖なる歴史の一たるべし。

し。

問 上述の如く、若し聖書の他に神聖なる書冊夥多ありとせば、之れに依りて聖書の價值を減ずるものならずや。

答 否な、決して然らず、何となれば今我が家の金庫に貯蔵する金貨と同様なる金貨が隣人の手にもありとするも、敢て自己の金貨は鉛と化けざる限り、尙ほ以前の如く金貨たるの價值を存するものにして、他人が之れを所有せざるが故に貴重なりと思考するは、抑も偏狭なる愚見と云ふべし、如此き人の思考は、蓋し無きもの好みの好事家の癖として見る可きものにして、宗教的骨董師の異名を與ふべきものなり。

神托

問 神托とは果して如何なるものなりや。

答 神が宗教的眞理を直接に人間に知覺せしめしと云ふ理想を表白するに、往々神托なる文字を適用せり、然れども吾人の神托とは或る廣き意味に於てのみに之れを用ゆるものにして、神の一般の思想を人の精神が獲得せし事實を表白せるものなり、彼のアイゼヤ或はテニソン等が神の托宣によりて、其の秀麗なる詩句を得、或はニウトン、ダルツァン、エチソン等は彼等の新思想を神托によりて獲得せりと爲すものなり、何となれば人心は神靈の類族にしあれば神の思想を追求し得可きものなればなり、新蘄にして善良なる思想、吾人の胸裏に發源せば是れ又神托たる

を得可きや。

答 然り、何となれば人は全く宇宙間の事物を離れて、何事をも合理的に思考し能はざる者なるを以てなり、然らば人の善美なる新思想は、宇宙の善美なる現象即ち神の思想の實現せるものより學び得たるものにして、是れ神托に非ずして何ぞや。

問 如何なる人は神聖なる神托を稟くるを得可きや。

答 常に熱心にして、正實善良なる思想を抱ける者は、大なる神の托宜を受くるを得べし、『心の清き者は幸福也、其の人は神を見るを得べし』豈只だ一二著名の人士のみに限らんや。

信仰

問 人若し神の觀念を有せざるも、猶ほ聖人の金言に従ひ「己れの欲せざる處は之れを人に施す事なく、又他人を愛する恰も自己を愛するが如くする時は、完全なる人間と云ふを得可きや。

答 斯の如き人は、賢良にして智識ある盲人の如し、愚者に比すれば、賢良智者たりと雖も、盲目の故を以て圓滿具足の人と云ふを得ざるが如し。

問 耶蘇は他の聖賢に比して異なる處ありや。

答 耶蘇の品性は熱心と健全なる冀望とを以て、充滿せり、故に此の點に於て稍や他の聖賢と區別するを得可きか。

問 耶蘇の希望は本來何れに在るや。

答 彼れの希望は神の正義と仁慈との上に動かす可からざる確信を有するに在り、而して耶蘇は善を以て宇宙の心髓と信認せり。

問 斯の如き永遠無究なる善の上に建つる信認を何と名づく可きや

答 吾人は之れを宗教的信仰と云ふ、是れ恰も或る建築技師が一定の學理に照して設計せし家屋橋梁は必らず、其目的に適ひ、其の用に耐ふべしとの信認の如し、蓋し斯る學理に通曉せる技師の上に於ける信認は、遙かに無學なる工夫等が建築の法則をも辨へずして、設計せしもの、上に於ける信認よりも、確實にして高等なる信認と云はざる可からず。

問 人は如何なる信認を此の宇宙に置く可きものなりや。

答 此の宇宙は物質及び勢力の法則に準據して成立存在するものなり、と同時に、又道德的精神的の宇宙なるが故に、人たるもの此の世

問 界に生存する限り物質的勢力の法則に準據すると同時に正義の法則に信賴せざる可からず。

問 萬世不易なる正義の法則は、如何なる事實の上に成立するものなりや。

答 正義の法則とは確かに神の仁愛、神の善意の上に成立せり、而して人心は之れに依りて自然に満足と安心を感得するものなり。

問 如此安心は人の行爲の上に如何なる關係を有するものなりや。

答 如此安心即ち信仰は、人心に向て私利を離れ、正義を行ふの勇氣を興へ、或は神の仁愛、神の善意が彼れと共に在りとの思想を實現するに足る處の一大強力なる感情を興奮せしむるものにして、是れ單に盲目なる従順よりも、遙かに優勝なるものなり。

問 如此安心は、如何なる信仰を表章するものなりや。

答 此の安心は、總べての悪事を以て、決して繁榮するものに非らずと
し、善事は又決して失敗に終るものに非ずとする信仰を表章する
ものなり、故に此の世界に在て善は將來猶ほ更らに高等なる善に
進歩するを得可き事實の預言たるを得べし。

問 人生進歩の企望は、如何なる信仰の上に成立するものなりや。

答 人生を以て進歩的氣運に相伴ふものなりとする信仰は、即ち人生
の今日に至る迄で間斷なく進歩せし歴史的事實と且つ高尚なる
善意の神に對する信仰とに依りて確言するを得べし。

問 吾人の希望する人生の進歩改良は、如何なる事實により、之れをし
て單に空想に留めしむる事なく、實現ならしめ得べきや。

答 吾人は人生の幸福を進め、社會の改良を期するを得可し、何となれ
ば吾人は幸に善良なる神の宇宙に生活するものなれば、必らず天

地の氣運と共に善良の方向に進歩し得可きものたるべし、吾人は
決して邪惡の世界冷淡なる無神の郷に彷徨する者に非ざるを以
てなり、萬一にも斯る邪惡の衝に彷徨ものたらしめば、斯る境界に
在て人生の幸福社會の改良を望むは、其の最も徒勞たるを以てな
り、故に人若し苟も人生の幸福社會の改良を希望するものたれば、
何ぞ其の人に善良なる宇宙の信仰皆無なるを得んや、果して然ら
ば其の人も亦少くも此の人生此の社會を以て進歩改良に適合せ
る善意の種子を含有するものなりと認識せる者たらざる可から
ず。

問 古來單に耶蘇のみ此の宇宙を以て善良仁愛なる神の宇宙と信仰
せしものなりや。

答 古今東西の聖人賢人は等しく耶蘇と同様なる確信を、此の宇宙と

問 其の神の上に安置せり。耶蘇或は東西の聖賢は如何なる程度に於て斯る幸福なる信仰を抱持せしや。

答 彼れ等は自己の信仰の爲めに身命を捧ぐるの熱心あり、其の熱心は恰も熟練なる游泳者が水の其の身を浮ましむるの力は水の深さに正比例して強大なるの事實を確認するが如く、敢て躊躇する事なく、勇で熱心の深淵に躍り入り、些少の畏怖の色も無く愉快に游泳するに似たり。

問 斯の如き信仰と理論とは其の間に齟齬なきものなりや。

答 此の信仰は理論よりも確實なる實際の事實より來れるものなれば決して其の間に齟齬ある可きものに非ず、換言せば此の宇宙を以て神聖なりと認識するは、即ち理論の最高尙なる結果なればな

問 斯る信仰は果して空想に非ざるや。

答 善良なる神に於ける信仰は確かに實際事實の結果によりて立據し得可し、彼の耶蘇或はソクラテースの如き確信ある生涯は非常に強健なるものにして安泰なり、非常に愉快にして生活の實効を收め、且つ其の生涯をして完全ならしむ、惟ふに架空虚偽の思想は決して斯くの如く人心を安泰に愉快に強健ならしむるを得可きものに非ざるべし。

問 理論の善悪は如何なるものに依りて判定せらるるものなりや。

答 其の理論にして之れを實際に應用し得可くんば、是れ即ち善良なる證據なり、然らば實際の事實は遙かに理論に勝りて價值あるものたるべし。

問 人生に關して最高尙なる理論とは如何なるものなりや。

答 是れ即ち宇宙を以て、善良なる神の宇宙なりとの理論なり、狐疑者
あらば來りて試みに其の理論を實際に應用せよ、試みに神の宇宙
に其の生活を營めよ、然る後其の結果によりて、恐くは自ら之を確
證するの時機を發見するに至らん。

問 信仰の箇條とは如何なるものなりや。

答 吾人の組織する教會は、彼の通常一般に信認するが如き信仰箇條
を有せざるなり、抑も信仰ク條とは各人信仰の要領なり、然れども
普通の宗教社會に在ては其意味の往々之れに超過せるものある
を見る、例之クリスト教國に於ける教會の信仰ク條の如きは、即ち
夥多の宗派が各々自由に之れを制定し、而して之を以て眞理の動
かすべからざるの標準とし、敢て其理非曲直を論ずるを許さず、苟

も之れに信從せざるものは其の教會々員たる事を許さざるのみ
ならず、黒端邪宗門として排斥する處の權威ある城壁なり、吾人の
團躰に在ては、未だ曾て如此條目を設けし事あらず、吾人は眞理の
標準として此の如き動かすべからざる處の信仰ク條を以て其會
員の意思自由の天性を束縛せし事あざりし、現に余輩が唯一教
協會々員となるに當て、如此信仰の必要ありとせしもの未だ曾て
聞かざる所なり。

問 然らば唯一の教徒は如何なる意義に於て其信仰の標準を確定す
る乎。

答 吾人の協會は各々相ひ類似せる宗教思想家の集合躰にして、猶ほ
一個人の獨立せる信仰を保持したるものなり、故に其信仰は一團
躰としての信仰に非ずして、一個人としての信仰なり。

吾人唯一教徒たるの名目は各々一個人の自由思想上に附與せられたる名目なりと信じ、且つその信仰は道理を以て最上にして且つ權威ある標準となし、而して人生の最大目的は其品性を高尚ならしむるに在りとの説に同意するものなり。

前陳の主旨に基る以上は、吾人は普通一般の意味に於て唯一教協會の信仰ヲ條を制定する事能はざるなり、然れども人間思想界の法則として唯一教徒は今日の如く自然同種の普通信仰を發生せり。自由思想家は共に合理的方法を以て真理を研究する際に當り、其方法の各々異なるにも關らず、其終極に於て同一の結果を見るに至るべし、故に多數の唯一教徒は種々なる宗教上の問題を討究するに當て終に普通一般の信仰を見出すに至るも亦た難からざる

事實なり、是に依て之れを見れば、吾人の所説と彼の近世の哲學及科學の諸説と其相ひ類似せる論點の如きは盡く相ひ容れ相ひ受くるを得るに至るも亦た故あるなり。

吾人の教會に於て、一個人の信仰を束縛するが如き信文等を置かざることは、彼の哲學若くは科學者等の團體に於けると毫も差異あるとなし。

吾人は個人主義を以て、其言行を支配し、或は同盟し、或は團體をなし、盡く天然の法則に原き、各自の道理心に訴へ、以て理非の判斷曲直の取捨を爲すものなり。故に唯一教徒の信仰は一々各々自らその責任を受く可き者たるなり。

問 「ローマ」教會の信仰の標準と反抗者(新教徒)の標準と何れか是なるや。

答 「羅馬」教會の信仰の標準とするものは、即ち教會の意旨、換言せば宗教的事物を専門に攻究せる高僧等の認定せる信仰の標準は遙かに未熟の人々が聖書を勝手に研究して立つる處の信仰よりも誤謬なかるべしとの主意なるべし。然れども事の實際に於て、歴史上の事實として、「ローマ」教會の意思大に正義公道に反する事例多々之れあり、其の一例として、僧侶等が傍若無人の舉動あるも、如何に其の信徒を虐げ、收斂を恣にするも、教會の認定せる僧侶の所爲は常に正當なりとし、或は學術即ち實際の經驗と全然反對なる地動説も、教會の認定せる限りは之れを正理とし、或は高僧等が肉慾に資するが爲めに信徒に獻金を促すが如きも、教會の意旨なれば亦正理なるのみならず、反て大金を投じて教會の認定する贖罪券を購入する者は如何に不正不義を行ひし者たりと雖も、今生中已でに入

天國に入る可きの保證たりとなすが如きは、智者を俟たずとも已に明白なる非道背理たるべし。然れども是れ亦教會の意思なれば正義たるべきなり。翻て反抗者は全然「ローマ」教會の非道なる意旨に反對して新派を開基せりと雖も、不幸にして聖書或は信仰箇條なるものを以て教會の意思に代用し、終に前者と同一の覆轍に陥れり。彼の聖書又は信仰ヶ條なるものは、果して完全無缺の金科玉條たりや否やに至ては、吾人大に疑惑無きに非ず。何となれば近代聖書の批評盛行はるゝの結果として、世の實際に不適當なる箇條實に少しとせず、况や其の以下に位せる信仰ヶ條の如きものに於ておや。到底完全なる將來人間社會の信仰を保證す可きの効力無きものにして、蓋し「ローマ」教會の意思と殆んど其軌を同ふするものと云ふ可きなり。故に吾人は右の兩標準を以て所謂五十歩百歩

の差異として等しく完全なる標準とするを得ざるなり。

問

然らば如何なるものを以て適當なる正義の標準となすべきや。

答

個人的理非の判断力即ち人の道理心を以て個人の信仰を確立すべき標準となす、何となれば教會の意見或は信仰ヶ條を以て信仰の標準とするも若し此の標準にして誤謬あらんか到底悔ゆるも亦及ばざるに至るべし、之れに反して自己の道理心を以て信仰の標準とせば萬一其の過誤を發見する曉には既に自己の道理心の一步進歩せし時たるを以て、此の進歩せる現在の道理心を以て又現在の信仰の標準とするを得べし、斯の如くして始めて活ける信仰を有するものと云ふべし、又其の過誤にあれば正當にあれば共に自ら責を負ふ可き處の信仰にして彼の教會の意思或は他人の制定せし信仰箇條の如き過誤なると正當なると共に責を他人に譲

るが如き無責任の信仰に非ざるや明かなり、夫れ生命とは日夜新陳代謝する處の活動作用を云ふものにして、千古萬古同一の形態を以て少しも進退せざるものは無論死物に等しき信仰たるを免かれず、故に吾人は進歩的にして活ける且つ自ら責任を有する信仰を以て遙かに無責任なる死せる信仰に勝れりとするものなり。

宗教的儀式

問

外形の宗教的儀式、就中複雑なる禮拜式或は洗禮式の如きものは果して合理的なりや。

答

人の思想を發表し、之れを實現せしむるに當てや、必らず外形の事物の上に顯はるゝは、人間社會に在て自然の通則たれば、彼の禮拜

式の如き、若し之れを行ふ人の眞情に發し、隨て其の人の靈氣をして高尙ならしむるを得可き場合に於ては、強ち之れを否定せざるのみならず、吾人は寧ろ之れを獎勵するに躊躇せざるべし、之れに反して禮拜或は其他或る宗派内の慣行儀式を以て一種特異なる魔力、功力或は神秘不可思議なる作用あるものゝ如くに思惟して之れに執着するは、決して吾人の取らざる處なり、故に宗教的儀式の人生に利する處往々反射作用に於て之れを見るを得可きものにして、儀式其の物は寧ろ何等の意味なきものたるべし、然れども之れを施行する人の心情に於て、自ら斯くあるべしと決定せし冀望を實現せしむるに當りて、大に其の効用を見るを得べし、彼の洗禮に於ても亦然り、吾人は之れを以て單に其の人の清潔なる生活を此の地上に遂げんとする意思發現の紀念として、之れを施行す

るも、決して不可なかるべし、是れ只だに洗禮のみに止らず、如何なる儀式にても其の人の悔改移善の日の紀念として之れを執行する敢て憚る處に非ざるべし、泰西諸國に於て、キリスト教の或る派は小兒をして如此儀式に與らしむると、與らしめざるとの一條に關し、随分見識に等しき議論もある次第なりと雖も、或る局外者の眼より之れを見る時は、甲乙何れにても差支無かる可き筈なるべし、譬へば小兒をして斯る儀式に與らしむるは、専ら其の子女をして將來清潔善良なる生活を送らしめんが爲めに、その兩親たる者の冀望を表白するものとせば、敢て或る一派の如く頑固に之れを拒絶するにも足らざるべし、然れども又一方に在ては、全く之れに反し、受洗者本人の冀望にも非る事物を、如何に兩親たりと雖も、獨りに其の頑是なき子女をして、斯る嚴肅に非ざれば、虚飾たるべき

禮式を強行するは又一種狂愚の沙汰と云はざる可からず。

問 基督教會に傳來せる聖晚餐式は如何なるものなりや。

答 晚餐式は基督が存生中其の師弟の間に行はれし最後の晩食を撰
撰せる一種の紀念にして、人若し彼れの性行を愛慕し長く之れが
紀念の爲めに時々之れを舉行する敢て怪むに足らざるべし、然り
と雖も世人動もすれば之れにより、一種の奇跡異能を一般の道理
以外に顯はすが如きものゝ如くに迷信せるは大なる誤なり、是れ
恰も我が國にて祖先の紀念日、又祖師の紀念日に於て親戚舊故相
集ひ其の先人を紀念すると同様にして若し斯の如き事物を以て
無用なりとせば、英雄豪傑の傳記、其他過去の歴史を鑒みるにも及
ばざるべし、然りと雖も吾人は之れを以て宗教的本性とし、或は教
祖傳來の遺法なるが故に是非に論なく強て之れを施行すべきも

のとは爲さず、寧ろ斯くの如きものは人心自然の情緒の發動とし
て之れを否定せざるに在り、故に吾人は古への聖賢の徳を追慕す
るは、單に晚餐式の一事のみでありとせず、或は之れに代ふるに何
事を以てするも、其の精神を貫徹するを得ば足れりとす。

問 聖晚餐は何人にて共にし得可きものなりや。

答 或る教派にては、單に自己の宗派の人々のみに限りて之れに列す
るを許し、他人の來會を拒絶せりと雖も、吾人は晚餐式のみならず、
何人にてても古聖の事跡を追懐せんとする者は、吾人と共に斯る宴
席に列るを歓迎する事、恰も我が皇靈祭に於て我が皇威を追慕す
る者は内外の入種を論せず、其の祝規に與ると何ぞ擇ばんや。

問 如此宗教的儀式は、本來宗教上必要條件なりや。

答 人の善美なる生涯を送るに向て、斯くの如き宗教上の儀式は本來